

2019年度指定 文部科学省事業

地域との協働による

高等学校教育改革推進事業（グローバル型）

研究報告書

第2年次

「観光都市 with SDGs」
～伊勢志摩！未来創造プロジェクト～

三重県立宇治山田商業高等学校

2019年度指定
地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）

研究報告書・第2年次

令和3年3月 三重県立宇治山田商業高等学校

目次

巻頭言 校長 廣島 朗

第1章 研究開発実施状況報告書（別紙様式2）	1
第2章 実施報告書	
第1節 SDGs 基礎プログラム	10
第2節 SDGs 探求プログラム	22
第3節 SDGs 語学力向上プログラム	46
第4節 伊勢志摩PRプログラム	55
第5節 国際交流プログラム	62
第6節 研修プログラム	66
第7節 成果発表に係る活動	77
第8節 効果の測定	97
第9節 運営指導委員会報告	105
第10節 グローカル人材育成コンソーシアムみえ報告	106

巻 頭 言

本校は、令和元年度に文部科学省から「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の指定を受け、「観光都市 with SDG s ~伊勢志摩！未来創造プロジェクト~」を本校テーマとし、「持続可能な未来を創造できるグローバルな視点を持った地域社会のリーダー育成」を目指した新しい教育活動に取り組み始めました。

研究を進めるにあたって、地元伊勢市をはじめ、運営指導委員の皆さま、コンソーシアム委員の皆さま、関係機関の方々からのご支援、ご協力に対して心より感謝申し上げます。

本研究では、持続可能な未来を創造できるグローバルな視点を持った地域社会のリーダーを育成するために、「SDG s 推進プログラム」と「観光都市を描くプログラム」の2つのプログラムについて研究開発を行っています。「SDG s 推進プログラム」では、SDG s の視点を持って自然・歴史・食文化等の魅力あふれる伊勢志摩地域を持続可能な社会として未来につなげるため、教科横断的な学習、探究的な学習、課題解決型学習、高度で実践的な英語教育をとおして、課題解決力、論理的思考力、地域への貢献力、語学力、すなわちこれらの力を「地球市民力」と定義して育成しています。もう一つのプログラム「観光都市を描くプログラム」では、観光資源豊かな伊勢志摩の魅力を広く国内外に発信するとともに、新しい観光ビジネスモデル等を実現するため、課題研究や国際交流活動等をとおして、企画力、調整力、実践力、突破力、創造力、すなわちこれらの力を「未来創造力」と定義して育成しています。

持続可能な社会を構築する「地球市民力」と観光都市伊勢志摩の未来を描く「未来創造力」を育成するためのプログラム開発にあたっては、生徒個々の資質・能力を測定するツール「Ai GROW」や、事業取組に関する生徒アンケート、コンソーシアム会議での評価等による成果・効果の検証を行い、持続可能なカリキュラムとなるように進めています。

さて、本年度は新型コロナウイルス感染症の蔓延防止対策により、年度当初から約2か月間臨時休校となり、学校再開後も制限ある活動しかできない中でのプログラム開発となりました。しかしながら、このような状況においても教職員と生徒が目標達成への思いを募らせ、試行錯誤しながら取り組んでまいりました。例えば海外研修が中止となった時には、同等の活動が国内でできないかを検討、情報収集して計画したり、国内移動も制限された後には予定していた学校等との交流活動をオンラインにて実現したり、さらに県内に置き換えて体験活動ができないかを模索して取り組んだり、逆に目的達成に向けて主体的に精力的な活動によるリーダー育成ができたのではないかと、自負するところです。

本報告書は、文部科学省より「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」に指定された3年間（令和元年4月から令和4年3月）のうち、中間期にあたる2年目における研究成果をとりまとめたものです。最終年度には研究成果をさらに発展・進化させて、本校教育活動に新たに組み込み、引き続き、生徒たちが、高い志をもって、新しい時代を切り拓く地域社会のリーダーとして羽ばたいていってくれるよう、取り組んでまいります。

最後になりましたが、本年度の本校の研究に多大なるご支援、ご指導を賜りました関係者の皆様方に改めて感謝を申し上げます。

三重県立宇治山田商業高等学校
校 長 廣 島 朗

「観光都市 with SDGs」～伊勢志摩！未来創造プロジェクト～

- 1 目的:持続可能な未来を創造できるグローバルな視点を持った地域社会のリーダーを育成
- 2 目標:「地球市民力」と「未来創造力」を育成するカリキュラム開発
- 3 取組概要



地球市民力の育成

グローバルな視野を持ち、持続可能な社会を構築する力
「課題解決力」、「論理的思考力」、「地域への貢献力」、「語学力」

1. SDGs 推進プログラム開発

① SDGs 基礎プログラム (教科横断的な視点)

- ◆ 貧困の根絶 (経済・社会開発) と持続可能な社会 (環境) の両立や不平等 (格差) の是正等について、様々な教科・科目で系統的に学習

② SDGs 探究プログラム

- ◆ 科目「課題研究」において、グローバルカンパニーでのインターンシップ、廃材を活用した商品開発等を実践



家具などの廃棄ごみリデュースプログラムの開発

③ SDGs 語学向上プログラム

- ◆ 科目「グローバル・コミュニケーション」において、地球的課題について、ディスカッションやイベントを実施



France

未来創造力の育成

「地域・世界」「人・もの・サービス」をつなぐ力
「企画力」「調整力」「実践力」「突破力」「創造力」

2. 観光都市を描くプログラム開発

① 伊勢志摩PRプログラム

- ◆ 科目「課題研究」で、コンソーシアムと連携し、SDGs の視点を踏まえた課題解決型学習の実施



様々な国の人と交流し、世界から訪れる人を出迎える観光プログラムの開発



自然と暮らしを繋げるグリーンツーリズムモデルの開発

- ◆ みえグローバル学生大使として県内の観光地での英語ガイドを実施

② 国際交流プログラム

- ◆ オーストラリア姉妹校との連携を強化 (Web会議システム活用, 長期留学生受け入れ)
- ◆ SDGs や観光についての海外研修プログラム作成



効果の測定とカリキュラム・マネジメント

- ◆ GROW
- ◆ パフォーマンス評価
- ◆ 生徒アンケート
- ◆ コンソーシアム会議等での評価 等

数値目標

- ◆ 地域の活性化プラン作成本数: 3本/3年間
- ◆ 海外と交流を行った回数: 3回/年
- ◆ イベント・ディスカッション等の評価規準作成: 5本/3年間
- ◆ 国際的なイベント等への参加回数: 3回/年 等

連携協力

- ◆ 皇学館大学文学部コミュニケーション学科
- ◆ 地方自治体 (伊勢市等)
- ◆ J A伊勢, 伊勢市商店街 等
- ◆ モンバルク・カレッジ (オーストラリア姉妹校)

第1章 研究開発実施状況報告書

1 研究開発完了報告書（別紙様式3）

(1) 事業の実施期間

令和2年4月20日（契約締結日）～ 令和3年3月31日

(2) 指定校名・類型

学校名 三重県立宇治山田商業高等学校

学校長名 廣島 朗

類型 グローカル型

(3) 研究開発名

「観光都市 with SDGs」 ～伊勢志摩！未来創造プロジェクト～

(4) 研究開発概要

ア SDGs推進プログラムの開発

(ア) SDGs基礎プログラム（教科横断的な視点）

各教科・科目（国語、地歴、公民、家庭、商業など）でSDGsに関連する知識を学ぶとともに、SDGsについて造詣が深く生徒への講演や指導、教員研修等を行うことができる者（以下「環境教育アドバイザー」という。）や企業でSDGsを担当している専門家、コンソーシアムの皇學館大学の教授等から、貧困の根絶（経済や社会開発）と持続可能な社会（環境）の両立や不平等（格差）の是正について学ぶ機会を設ける。

(イ) SDGs探究プログラム

科目「課題研究」において、1・2年次で学習したSDGsの知識を活用し、伊勢市内のグローバルカンパニーへのインターンシップや廃棄食材を使用した商品開発等をとおして、思考力・判断力・表現力を高める探究的な学びを実施する。

(ウ) SDGs語学力向上プログラム

語学力の向上や異文化理解を深めるため、留学生との交流会や校内外の英語スピーチコンテスト等への積極的な参加を推進する。また、学校設定科目「グローバル・コミュニケーション」を令和2年度から開設し、SDGsを主テーマに大学生や留学生と福祉、医療、環境等の地球的規模の課題に関するディスカッションやディベートをとおして、英語コミュニケーション力の向上を図る。

イ 観光都市を描くプログラム開発

(ア) 伊勢志摩PRプログラム

科目「課題研究」において、観光資源（自然・歴史・食等）が豊かな伊勢志摩地域を活性化するため、課題研究「観光とビジネス」で答志島でのエコツアー体験や、自治体の「まち・ひと・しごと総合戦略」についての調べ学習をとおして、旅行コンテンツやプランを作成し、JTB観光開発プロデューサーへのプレゼンをとおして「高校生エコツーリズム」の取組を行う。また、2年生「ビジネス情報管理」において、海女をテーマにした動画を作成し、観光甲子園に応募、ESS部（みえグローバル学生大使）が伊勢志摩情報発信のSNS（インスタグラム）を定期的に更新する「“山商”伊勢志摩観光大使」の取組を行う。

(イ) 国際交流プログラム

国内外での国際交流活動（観光先進国への海外研修、三重県が観光協定を結んでいる台湾との交流等）を推進し、主体性・積極性等を育成するとともに、観光先進国から、伊勢志摩地域を観光都市として築き上げる手法を学ぶ機会を創出する。

ウ 効果測定の開発・検証

(ア) パフォーマンス・ポートフォリオに関する評価規準の策定

- 英語によるディベートやディスカッション等のパフォーマンス、課題研究及び校外における活動に係るポートフォリオを評価するための評価規準を策定する。

(イ) 資質・能力測定ツール「AiGROW」を活用した各種プログラムの効果測定

- IGS株式会社と連携し、資質・能力測定ツール「AiGROW」を活用して生徒の

資質・能力の伸びを把握し、各種プログラムの効果を検証する。

(ウ) 外部評価

地域・コンソーシアム等への提言を含めた発表会において、課題研究の成果を地域社会に発信し、アンケート等により外部有識者の評価を受ける。

(5) 学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無

学校設定教科・科目	開設している	・	開設していない
教育課程の特例の活用	活用している	・	活用していない

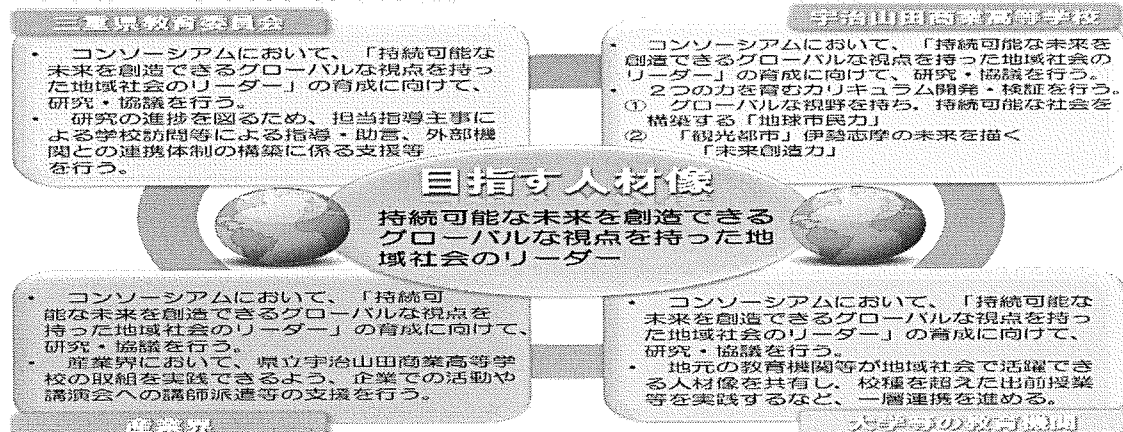
(6) 運営指導委員会の体制

運営指導委員会の構成員

氏名	所属・職	備考
高見 啓一	日本経済大学 准教授	学識経験者
矢部 一成	I G S株式会社 教育事業部マネージャー	グローバルに活躍する教育分野の企業
生川 哲也	三重県雇用経済部国際戦略課長	関係行政機関職員
三田 泰久	株式会社アーリー・バード 代表取締役	地域のグローバル企業
井上 珠美	三重県教育委員会事務局高校教育課長	関係行政機関職員

(7) 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

グローバル人材育成コンソーシアムみえ



コンソーシアムの構成団体

機関名	機関の代表者名
宇治山田商業高等学校	学校長 廣島 朗
伊勢市役所	産業観光部 部長 須崎 充博
皇學館大学	文学部コミュニケーション学科 教授 豊住 誠
伊勢農業協同組合	営農部 部長 河井 英利
ULジャパン	人事総務部 部長代理 福村 伝史
海女小屋 はちまんかまど	代表取締役社長 野村 一弘
三重県教育委員会事務局高校教育課	課長 井上 珠美

(8) カリキュラム開発専門家，地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職
カリキュラム開発専門家	三橋 正枝	(特定非営利活動法人) SesLab 代表理事
地域協働学習支援員	堀江 しおん	伊勢志摩ビデオサービス(株) 役員

(9) 管理機関の取組・支援実績

ア 管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

- ・ 県事業「学びのSTEAM化推進事業」の研究校に指定
- ・ 県事業「新学習指導要領に対応した英語教育改善事業」の研究校に指定
- ・ 商品開発への協力（コンソーシアム）

イ 事業終了後の自走を見据えた取組について

- ・ 新規の県事業を立ち上げ、継続して地域と協働した取組やグローバル人材の育成に向けた取組ができる支援体制を構築予定

(1.0) 研究開発の実績

本研究開発において、持続可能な未来を創造できるグローバルな視点を持った地域社会のリーダーを育成するため、「地球市民力（課題解決力、論理的思考力、地域への貢献力、語学力）」と「未来創造力（企画力、調整力、実践力、突破力、創造力）」を身に付ける「SDGs推進プログラム」と「観光都市を描くプログラム」をコンソーシアムや地元企業等と連携して実施している。

ア 実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
SDGs講演会								1回				
各科目の内容に沿ったテーマでSDGsに関する授業を実施	全科目で1回以上実施											
科目「ビジネス情報管理」において、海女をテーマとした伊勢志摩PR動画を作成	通年											
科目「ビジネス情報管理」で実施した取組を伊勢市長へプレゼン提案										1回		
科目「課題研究」において、地元企業と連携した商品開発	通年											
科目「課題研究」において、観光をテーマに探究活動	通年											
科目「課題研究」において、SDGsを踏まえたビジネスプラン作成	通年											
商業の科目において、コンソーシアム等の地元企業人と交流				1回	4回	5回	3回	3回	1回	1回		
英語セミナー開催				1回					1回			
科目「グローバル・コミュニケーションA・B」においてSDGsの観点に基づいた授業を実施	通年											
校内英語スピーチコンテスト開催										2回		
みえグローバル学生大使活動	通年											
SDGsや観光に関する研修						1回	4回	3回	1回	1回		
全生徒・コンソーシアム等を対象とした成果発表会								1回			1回	
効果測定の開発・検証(GROW)				1回	2回	1回			1回	1回		

イ 実績の説明

(ア) 研究開発の内容や地域課題研究の内容について

① SDG s 推進プログラム開発

- ・ SDG s 基礎プログラムとして、すべての教科・科目でSDG sに関連する授業を1回以上実施した。
- ・ SDG s 探究プログラムとして、科目「課題研究」において、SDG sに取り組む企業のオンライン調査や、廃棄食材を使用した商品開発などを実施した。また、SDG sに取り組む企業・自治体での実地研修や、SDG s先進国であるスウェーデンの事例調査をオンラインによって実施した。
- ・ SDG s 語学力向上プログラムとして、学校設定科目「グローバル・コミュニケーションA・B」において、SDG sの観点に基づいた授業を実施した。また、コミュニケーション能力を高めるため、終日英語のみで会話する学年別英語セミナー（国際科）や、校内スピーチコンテストを実施した。

② 観光都市を描くプログラム開発

- ・ 伊勢志摩PRプログラムとして、科目「ビジネス情報管理」において海女をテーマとした伊勢志摩PR動画を作成し、NEXT TOURISM 主催の「観光甲子園」に応募した。また、科目「課題研究」において、地方創生を目指した取組を学ぶ探究活動として、SDG sの理念に基づき自然資源を生かしたグリーンツーリズムなどを利用し実施した。さらに、みえグローバル学生大使（三重県雇用経済部国際戦略課事業）の委嘱を受けたESS部生徒を中心に、SNS（Instagram）による三重の魅力紹介や、第9回太平洋・島サミット開催に向けたオンライン活動（島サミットのPR、日本文化の紹介、三重の情報発信）に参加した。
- ・ 国際交流プログラムとして、12月にオーストラリア姉妹校の生徒とオンラインによる交流を実施した。

(イ) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等）

・ SDG s 基礎プログラム

全教科・科目で、教科・科目の特性を生かした授業を実践した。（例えば、現代社会の諸課題である「地球環境問題」、「資源・エネルギー問題」、「国際経済の動向と貧困の解消」等についての考察を深めるため、グループ討議や発表）

・ SDG s 探究プログラム

商業科目「課題研究」において、地域の廃材を活用した商品開発や持続可能な社会の実現に向けたビジネスアイデアの考案をした。

・ SDG s 語学力向上プログラム

学校設定科目「グローバル・コミュニケーションA・B」において、SDG s 基礎プログラムで学んだことを校内スピーチコンテストの場で発表した。

・ 伊勢志摩PRプログラム

商業科目「ビジネス情報管理」において、海女をテーマとした伊勢志摩PR動画を作成し、「観光甲子園」に応募した。

ESS部において、みえグローバル学生大使の委嘱を受けて、SNS（Instagram）を利用した三重県の紹介や、第9回太平洋島サミット開催に向けてオンラインイベントやオンライン交流会を実施した。

商業科目「課題研究」において、SDG sの理念に基づき自然資源を生かしたグリーンツーリズムなどを利用して地方創生を目指した取組を学ぶ探究活動を実施した。

・ 国際交流プログラム

オーストラリア姉妹校と、オンラインによる生徒同士の交流を12月に実施した。

(ウ) 地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

- ・ SDG s 講演会を開催し、生徒・教員ともにSDG s に関連する知識を習得する機会を設けるとともに、教科を横断した授業研究を実施した。
- ・ 各教科において、1年目に実施した授業実践をもとにSDG s の視点を踏まえた学習内容を再検討し、それに基づいた授業を各教科・科目で1回以上実施した。また、それらを地域課題研究委員会で集約し、本事業の目的実現に向けたPDCAサイクルの構築につなげるための検討を行った。

(エ) 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

「持続可能な未来を創造できるグローバルな視点を持った地域社会のリーダー」を育成するため、学校に地域課題研究委員会を設置して、生徒が「地球市民力」と「未来創造力」を身に付けられるプログラムの開発・実践のための企画運営を行うとともに、カリキュラム開発専門家や地域協働学習実施支援員（外部人材）を活用し、プログラムの充実を図った。また、伊勢志摩地域を支える人材育成を考える「グローバル人材育成コンソーシアムみえ」を構築し、産学官のスムーズな連携による探究的な学びを実現した。

さらに、本事業の目的や取組の方向性を踏まえた学習活動等が実践できているかを検証するため、運営指導委員会を設置し、効果等の検証を行うことで、事業のPDCAサイクルを構築した。

(オ) 学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

- ・ 地域課題研究委員会において、推進担当者を中心に、各プログラム内容について協議を進めるとともに、地域協働担当者や海外研修担当者を校内に設置し、地域と連携した取組や海外研修プログラムを作成した。

(カ) カリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員の学校内における位置付けについて

- ・ カリキュラム開発専門家は、本事業の学習活動および各プログラムに対して、持続可能な社会の実現に向けた「SDG s の視点」を踏まえた指導・助言を行った。また、そのために地域課題研究委員会へ参加した。
- ・ 地域協働学習実施支援員は、商業科目「ビジネス情報管理」の授業に参加し、伊勢志摩PR動画作成について指導・助言を行った。また、第3回コンソーシアム会議に参加し、意見交換を行った。

(キ) 学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

- ・ 校内の地域課題研究委員会にて、定期的に各プログラム作成の進捗報告や実践報告を行い、改善策などについて検討した。
- ・ 2月に生徒アンケートを実施し、その成果を検証し、次年度への改善につなげた。

(ク) カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

- ・ コンソーシアム会議にて、今後の取組に関する現状と課題について協議し、意見交換を行った。また、新型コロナウイルス感染症の影響により、当初予定していた海外研修（スウェーデン：SDG s の先進的な取組を学ぶ、マレーシア：観光資源を活用したエコツアーやグリーンツーリズムを学ぶ）が中止となったため、当初の目的を達成できる国内研修について協議し、意見交換を行った。
- ・ グローバルワークショップとして、代表生徒がこれまでの取組と今後の計画について中間報告をし、その内容や学びの過程から生じた生徒の疑問について意見交換を行った。

- (ケ) 運営指導委員会等、取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援について
- ・ 運営指導委員会において、資質・能力測定ツール「AiGROW」による各種プログラムの効果を検証した結果、有効性が高いことを共有した。
 - ・ みえグローバル学生大使の取組への具体的な示唆をいただいた。
 - ・ 本事業の各プログラムについて、持続可能な体制の確立に向けて協議を行った。
- (コ) 以下の①～⑥の趣旨に応じた取組について
- ① 地域の特性を踏まえつつ、グローバルな社会課題・地域の社会問題の解決に向けた学びや生徒のキャリアデザインを促すための取組
- ・ SDGs 講演会を開催し、あらためてSDGsの必要性を問うとともに、これからの社会を支える高校生がSDGsにどのように向き合うべきなのかを考える機会とした。
 - ・ 農業をとおしたSDGsの取組を学習するため、第一次産業（農業）を中心にSDGsを進めている兵庫県丹波市の取組を視察した。
 - ・ 県内のSDGsに関する取組を学習するため、「SDGs未来都市」及び「自治体SDGsモデル事業」に選定されたいなべ市において、SDGsに関する官民の取組を視察した。
 - ・ 資源循環型社会を目指す取組を学習するため、鳥羽市リサイクルパークを訪問し、生ゴミ堆肥化や資源循環について学習し、環境問題について考えた。
- ② 外国語教育において、地域との関連から英語のコミュニケーション能力を高める取組
- ・ 太平洋・島サミット開催に向けてのオンラインイベントや海外の大学生とのオンライン交流会に参加し、英語で伊勢志摩の魅力を紹介した。
- ③ 外国語教育におけるディスカッション等の主体的な学びを促す取組
- ・ 学校設定科目「グローバル・コミュニケーションA・B」において、語学力の向上と異文化理解等を深めるため、英語でディスカッションを行った。また、英語のスピーチ原稿等を作成し、校内スピーチコンテストで発表した。
- ④ 海外の学校との定常的な連携による海外研修等
- ・ 9月のオーストラリア姉妹校生徒受け入れや3月のオーストラリア姉妹校への海外研修は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため、中止した。
 - ・ スウェーデン研修プログラムの開発
SDGsの視点を踏まえた地域リーダーを育成するため、SDGsの理念に基づいた経営をしている企業への訪問や現地の高校生との交流を計画していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、中止した。代替として、スウェーデン研修で面会予定だった方とオンライン会議を実施し、SDGs先進国について事例調査を行った。
 - ・ マレーシア研修プログラムの開発
伊勢志摩の基幹産業である観光業等で活躍する人材を育成するため、実際のエコツアー等を体験する研修を計画していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、中止した。代替として、鹿児島県沖永良部島の自治体や高校生とオンライン会議を実施し、SDGsの理念に基づき自然資源を生かしたグリーンツーリズムなどを利用して地方創生を目指した取組について双方が意見を出し合った。
- ⑤ 海外からの留学生等と一緒に学ぶ探究的な活動
- ・ オーストラリア姉妹校の生徒と、お互いの国のSDGs取組に関する意見交流を行った。
- ⑥ 地域への理解を深めるための取組
- ・ みえグローバル学生大使（生徒13名）として、小学生向け英語クイズの教材を作成し、地域の小学校に紹介した。
 - ・ 商業科目「ビジネス情報管理」において、伊勢市職員とともに地域の食品スーパーで、

買い物客に消費期限や賞味期限が近い食品から購入してもらうよう呼び掛け、食品ロス削減の啓発活動をした。

(サ) 成果の普及方法・実績について

- ・ 地域の本事業に係る委員に案内し、2月1日に成果発表会を開催して学校全体の活動取組とした。

(11) 目標の進捗状況, 成果, 評価

本事業は、「SDGs推進プログラム」と「観光都市を描くプログラム」の実践により、学習内容の充実が図られ、「地球市民力（課題解決力・地域への貢献力等）」と「未来創造力（企画力・創造力・実践力等）」を生徒に身に付けることを目標としている。

ア 「地球市民力（課題解決力・地域への貢献力等）」と「未来創造力（企画力・創造力・実践力等）」の育成

(ア) 地域や企業等と連携した取組やコロナ禍における探究活動等をとおして、「地球市民力」と「未来創造力」が身につけているかを生徒アンケート等により把握する。

指標 (アウトカム)	2018年度	2019年度	2020年度	目標値
「地球市民力」と「未来創造力」が身についた生徒の割合	59%	61.0%	66.7%	70%

(イ) IGS株式会社のAiGROWを活用した測定

2020年において有意性が認められたのは、「課題設定」と「創造性」、「協働性」の3つ。2019年7月と2020年12月を比較すると、ほとんどのコンピテンシーの成長に有意性が認められた。1年次に課題であった「課題設定」と「論理的思考」、「個人的実行力」のうち、「個人的実行力」について引き続き課題があることが分かったので、次年度のプログラムに反映する。

分野	コンピテンシー	2019年		2020年		2020年7月→12月			2019年7月→2020年12月		
		7月	12月	7月	12月	変化	有意差	t検定	変化	有意差	t検定
認知系	課題設定	0.567	0.568	0.584	0.604	0.020	あり	0.033	0.046	あり	0.000
	論理的思考	0.563	0.571	0.599	0.606	0.007	なし	0.427	0.049	あり	0.000
	疑う力	0.574	0.579	0.599	0.611	0.012	なし	0.200	0.040	あり	0.000
	創造性	0.509	0.542	0.565	0.595	0.030	あり	0.005	0.089	あり	0.000
自己系	個人的実行力	0.638	0.629	0.628	0.622	-0.007	なし	0.481	-0.004	なし	0.706
	自己効力	0.553	0.563	0.597	0.616	0.019	あり	0.037	0.058	あり	0.000
	耐性	0.601	0.6	0.610	0.634	0.024	あり	0.005	0.048	あり	0.000
	決断力	0.59	0.586	0.586	0.608	0.022	あり	0.012	0.023	あり	0.021
他者系	表現力	0.537	0.553	0.556	0.567	0.011	なし	0.300	0.023	あり	0.033
	共感・傾聴力	0.613	0.605	0.623	0.611	-0.012	なし	0.241	0.007	なし	0.543
	柔軟性	0.576	0.58	0.588	0.596	0.008	なし	0.360	0.031	あり	0.001
	影響力の行使	0.46	0.488	0.516	0.545	0.029	あり	0.007	0.067	あり	0.000
コミュニティ系	地球市民	0.523	0.536	0.562	0.569	0.007	なし	0.439	0.054	あり	0.000

※ 太字は、本事業で育成したい資質・能力。「協働性」は「自己効力」と「影響力の行使」の組み合わせで定量化

※ t検定とは、事前と事後の変化がプログラムの効果によるものと仮説を立て、実行したプログラムの有意性を検証した結果

イ 地元に着用して活躍する地域人材の育成

本事業は、「持続可能な未来を創造できるグローバルな視点を持った地域社会のリーダー」を育成することを目的としており、地元で就職し、地元に着用して活躍する人材を育成する必要があることから、企業アンケートにより職場定着の状況を継続して把握するとともに、各プログラムに地域の魅力や働くことの意義等について理解する学習内容を反映する。

指標 (アウトカム)	2018年度	2019年度	2020年度	目標値
地元就職者のうち、高校卒業後に入社した地元企業での職場定着率	73.3%	76.0%	97.4%	80%

※ 2020年度職場定着率は、2017年度から2019年度卒業生のうち、就職者がいる地元企業からの聞き取りにより把握

ウ 語学力の向上

SDGs 語学力向上プログラムにおいて、英語のみを使用する環境を創出するとともに国際交流活動の充実を図ることで、英語コミュニケーション能力の向上及び異文化理解の促進を図る。今年度から、学校設定科目「グローバル・コミュニケーションA・B」を新設して、英語コミュニケーション力等の一層の向上をめざしている。

指標 (アウトカム)	2018年度	2019年度	2020年度	目標値
卒業時における生徒(200人)の4技能の総合的な英語力としてのCEFRのA2レベル以上の生徒の人数	84人	64人	74人	120人

エ 地域人材を育成する高校としての活動について

グローバルな課題解決のために必要なIT関連の全国大会で優勝するとともに、コロナ禍で様々な全国大会が開催中止となる中、観光甲子園やエシカル甲子園にエントリーするなど多くの生徒が各種大会に挑戦した。また、本県の「みえグローバル学生大使」として任命されている本校生徒が、地域における国際交流活動を行った。次年度のプログラムでは海外研修プログラム等、積極的にグローバルな視野を身に付ける機会を実践する。新型コロナウイルス感染症の感染状況によっては、オンラインによる活動を行う。

指標 (アウトカム)	2018年度	2019年度	2020年度	目標値
グローバルな社会又は地域のビジネス課題に関する公共性の高い全国大会等における入賞者数	2.5%	5.7%	2.2%	10%
みえグローバル学生大使として、地域において国際交流活動に参加	—人	29人	13人	120人

オ 地域人材を育成する地域としての活動について

本事業においては、コンソーシアムを構築し、伊勢志摩地域として未来の大人を育成する取組を進めた。「課題研究」をはじめ「ビジネス経済応用」「ビジネス情報管理」「財務会計Ⅱ」等の科目において、地元企業や自治体、大学等から企業人等の派遣を受け、学習内容の充実を図ることができた。卒業までの3年間のうち1回はインターンシップ等の体験ができる体制の構築については、継続課題となった。

指標 (アウトカム)	2018年度	2019年度	2020年度	目標値
「SDGs推進プログラム」及び「観光都市を描くプログラム」への企業・地方自治体・企業等の協力者数	—人	40人	51人	50人
地元企業でインターンシップ等を体験した生徒の割合	32.1%	42.0%	61.9%	100%

※ インターンシップ等体験生徒の割合は、卒業時における生徒(200人)の割合で計算

(12) 次年度以降の課題及び改善点

ア SDG s 推進プログラムの開発

(ア) SDG s 基礎プログラム

本年度は、SDG s についての講演会を実施したり、すべての教科・科目でSDG s に関する内容を扱った。次年度以降は年間をとおして、SDG s を核とするカリキュラム・マネジメントについて学習指導委員会で協議し、全教科・科目の連携を図りながら体系的にSDG s の知識を育成する必要がある。

(イ) SDG s 探究プログラム

3年次の科目「課題研究」において、1・2年次で学習したSDG s の知識や研修経験を生かして、テーマ課題に対して思考力・判断力・表現力を高める探究的な学びを実施する。

(ウ) SDG s 語学力向上プログラム

大学等の留学生等との交流会やディスカッション及びディベート等をとおして、英語コミュニケーション力の向上を図るとともに語学力の向上や異文化理解をさらに深める。

イ 観光都市を描くプログラム開発

(ア) 伊勢志摩PRプログラム

科目「課題研究」のうち本年度新設したテーマ「観光とビジネス」において、観光資源（自然・歴史・食等）が豊かな伊勢志摩地域をさらに活性化するためのPR取組を行う。

(イ) 国際交流プログラム

観光先進国（マレーシア）への海外研修や、三重県が観光協定を結んでいる台湾の商業高校生との交流を推進し、主体性・積極性を育成する。新型コロナウイルス感染症の感染状況によっては、オンラインによる海外事例調査の実施、SDG s の取組事例調査や観光資源を活用したエコツアーやグリーンツーリズムを学ぶ国内実地研修を実施する。

ウ 効果測定の開発・検証

(ア) パフォーマンス・ポートフォリオに関する評価規準の策定

- ・ パフォーマンス課題等に対するルーブリック開発により評価規準が明確になったが、校外における活動等に関する評価規準については引き続き検討する必要がある。

(イ) 資質・能力測定ツール「AiGROW」を活用した各種プログラムの効果測定

- ・ IGS株式会社と連携し、資質・能力測定ツール「AiGROW」を活用して、生徒の資質・能力の伸びを把握するとともに、三菱UFJリサーチ「高校魅力化評価システム」の運用も開始していることから、より効果的な資質能力の測定方法についてさらに研究する。

【担当者】

担当課	高校教育課	TEL	059-224-3002
氏名	上村 峰生	FAX	059-224-3023
職名	指導主事	e-mail	uemurm04@pref.mie.lg.jp


第2章 実施報告書


第1節 SDGs 基礎プログラム

1 各教科・科目における授業実施

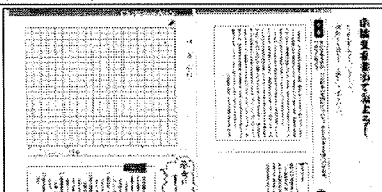
(1) 各教科・科目の授業実施報告

昨年度に引き続き、SDGs 基礎プログラムとしてすべての教科・科目でSDGs に関連する授業を1回以上実施した。

教科	国語	科目	国語表現
日時	10月12日(月)3限目	学科・学年	国際科・2年
内容	三重県、みえ次世代育成ネットワークが主催する「第12回 ありがとうの1行詩コンクール」に応募するため、家族や友人、自分を支えてくれている人に思いをつづった。 11 住み続けられるまちづくりを 17 パートナリシップで目標を達成しよう		

教科	国語	科目	国語表現
日時	11月18日(水)5限目	学科・学年	商業科情報処理科(選択)・3年
内容	JAFが主催する「エコ川柳コンクール」に応募するため環境問題について考え、作品作りに取り組んだ。 7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに 11 住み続けられるまちづくりを 17 パートナリシップで目標を達成しよう		

教科	国語	科目	現代文B
日時	11月2週目5時間分	学科・学年	全学科・3年
内容	教科書(教育出版)に掲載されている加藤尚武による評論「未来への責任」を5時間にわたり学習した。 評論を読み解く中で、環境問題の解決には、「世代倫理」が不可欠であり、まだ存在しない未来の人たちへの思いを持って取り組むことの意味を改めて実感することができた。 7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに 11 住み続けられるまちづくりを 12 つくる責任 つかう責任		

教科	国語	科目	国語総合
日時	冬休みの課題	学科・学年	全学科・1年
内容	冬休みの課題として、「ゴミ収集の有料化」という課題文で「小論文」にチャレンジした。初めての小論文であったので、課題を環境問題にし、SDGsに関心を持たせた。		

教科	社会	科目	選択現代社会
日時	6月15日(月)・24日(水)5限目	学科・学年	全学科・3年
内容	1. 「『食品ロス』に関するアンケート」を実施。 2. 「2030SDGSで変える(朝日新聞)」の「SDGS イベント 食と服の大量廃棄 今、何ができるのか」を読み、「食品ロス」について自分の考えをまとめる。 資料: 「2030 SDGSで変える」(編集・発行: 朝日新聞社 SDGSプロジェクト)		

教科	社会	科目	現代社会
日時	8月7日(金)〔夏季補習〕	学科・学年	全学科・3年(希望者)
内容	1. 読売新聞社説「レジ袋有料化 プラごみ削減への第一歩に」を読み、レジ袋の有料化が私たちの生活にどのような影響を与えるかについて、自分の考えをまとめる。 資料：読売新聞社説(2020.7.2)		

教科	社会	科目	現代社会
日時	9月23日(水)・5限目	学科・学年	全学科(選択)・3年
内容	1. 毎日新聞社説「コロナ時代 持続可能な地球へ 立ち止まり変革する時だ」を読み、「循環型社会」の構築に向け、自分自身が今までに行ったことを振り返り、そのこととあわせて環境問題についての自分の考えをまとめる。 資料：毎日新聞社説(2020.8.28)		

教科	社会	科目	選択現代社会
日時	10月26日(月)・5限目	学科・学年	全学科(選択)・3年
内容	1. 毎日新聞社説「選択的夫婦別姓の導入 立法府が行動するときだ」を読み、自分の考えをまとめる。 資料：毎日新聞社説(2020.10.24)		

教科	数学	科目	数学I
日時	2月	学科・学年	全学科・1年
内容	過去の世界の気温の推移や、消費電力量、環境問題に関する数値等のデータをグラフ化することにより環境問題を考える機会を設ける。また、各データの中に相関関係を見つけることにより、環境を守るために、どのような対策をする必要があるのか考える。		

教科	理科	科目	科学と人間生活
日時	1月22日(金)3限目	学科・学年	情報処理科・3年
内容	「16 平和と公正をすべての人に」についての授業。1945年に起きた「九州帝国大学医学部生体解剖事件(相川事件)」を題材とした遠藤周作の小説『海と毒薬』の熊井啓監督による映画化作品『海と毒薬』の一部を鑑賞した。そして、資料(添付のもの)を参考にして、実際の生体解剖事件や映画『海と毒薬』について、生徒各自で考え、さらにこれからの医学研究のあり方に考えた。		

教科	理科	科目	生化学入門
日時	1月21日(木)1限目	学科・学年	全学科(選択)・3年
内容	自分の健康について考えさせるとともに、それをした結果周りにどう影響するかを考えさせた。 目標3のより細かい目標から2つ選び、その目標に対して、誰が何をどのように取り組むべきかを自分なりに考えさせた。		

持続可能な開発のための目標(SDGs)について考える!!

3年()組()席名前()

目標3. あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する

ほかの目標に影響を与えることなくできることを考えてください。

この目標に対して誰が何をどのようにできるか考えてみよう!!(2つ以上)

下2つの枠内の下線には裏面の細かい目標の番号を書き、それに対しての内容を記入

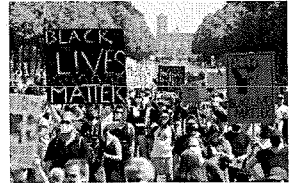
自分の健康_____

教科	保健体育	科目	保健
日時	11月11日(水)3限目	学科・学年	商業科・2年
内容	健康被害の防止と環境対策を学習する前に、今起きている環境問題について大気汚染、水質汚濁、土壌汚染の3つの観点からそれぞれ考え意見交流をした。その後、環境対策を学び、自分の生活の中で、環境を守るためにできることを各自ノートに記入した。そして2人1組で話し合った後、クラス全体で意見交流を行った。 ・公共交通機関を利用する、車にできる限り乗らない ・ごみをリサイクルする、ポイ捨てをしない、ごみを減らす、正しく捨てる ・マイ箸、マイバック、マイボトルを利用する ・ソーラーパネルの開発 ・ハイブリッド車、電気自動車、水素自動車の普及 ・油や食べくずなどを流さず拭き取る		

などの意見が出た。

教科	保健体育	科目	保健
日時	11月10日(火) 2限目	学科・学年	商業科・2年
内容	<p>大気汚染物質による地球環境問題、「地球温暖化」「酸性雨」「オゾン層の破壊」など大気汚染から気候変動にどのような影響を与えるのか、また、人間の健康にどう影響していくのかを考えさせ、私たちの住む環境をよりクリーンにするための取り組みを考えさせていく。また、日本や世界のゴミについての映像を見せ、ゴミによって環境に大きな影響を与えるなど、理解させるとともにどのような改善をしていくことが大切かなど考えさせた。</p> <p>YouTube 参考 ⇒ 産業廃棄物</p>		

教科	英語	科目	コミュニケーション英語Ⅲ
日時	6月	学科・学年	国際科・3年
内容	<p>教科書 <u>LANDMARK English Communication III</u> <u>Lesson 2 Blood is Blood</u></p> <p>背景知識として、主に1950年代から1960年代にかけて、アフリカ系アメリカ人が、公民権の適用と人種差別の解消を求めて行った大衆運動について動画等を通して学んだ。そして、輸血技術の向上に貢献したアフリカ系アメリカ人科学者チャールズドリュー博士(1904-1950)の生涯について説明した文章読み、理解を深めた。チャールズドリューの生き方や考え方について毎回の授業でペアやグループで意見交換を行い、人種差別問題を自分事として捉えて思いを伝え合った。最後に現在のアメリカでのBlack Lives Matter運動について動画を見て、1950年代の公民権運動との違いなど気づいたことやチャールズドリューが現在生きていたら何を思い、何を言うかという問いについてグループディスカッションで話し合った。</p>		



教科	英語	科目	コミュニケーション英語Ⅲ
日時	11月	学科・学年	国際科・3年
内容	<p>教科書 <u>LANDMARK English Communication III</u> <u>Lesson 7 Political Correctness</u></p> <p>まず、ポリティカル・コレクトネスとは「用語における差別、偏見を取り除くための政治的な観点から見て正しい用語を使う」という意味の言葉であり、他者を侮辱したり、傷つけたりする言語を排除するものであることを学んだ。そして、以前は男女によって異なっていた職業の呼び方が近年大いに変わったことや公正な呼び方の具体例、その行き過ぎについて知り、行き過ぎかどうかを判断するのは次世代の人々、つまり自分達であるということ、読み物を通して学んだ。毎回の授業の中で、その具体例について取り上げ、ペアやグループで話し合い、気持ちや考えを伝え合った。最後にまとめとして、今後の差別のない社会作りに向けてどのような観点で何が出来るのかをペアでリサーチし考えをまとめ、プレゼンテーションを行った。</p>		



教科	英語	科目	コミュニケーション英語 I
日時	8月31日(月) 4限目	学科・学年	国際科・1年
内容	教科書「Landmark English Communication I」レッスン6で山田周生さんがバイオディーゼルカーに乗って食用の廃油を集めて世界中を周り、自動車の燃料に加工して使うことにより世界一周をしたという話を読んだ。この課で学んだことをきっかけに、自分たちで不要な物をリサイクルやリユーズしてできることをペアで話し合った。		

教科	家庭	科目	家庭総合
日時	6月1日(月) 6限目	学科・学年	商業科・2年
内容	<p>普段の生活における環境意識について考えた。3Rについて、自分自身がどのような行動すればよいのかを考え、グループで相談した。また身近にある環境ラベルについてクイズ形式で何を意味するマークか考えた。</p> <p>さらに食品について日本には季節ごとに行事食があるが、その翌日の廃棄物の写真を見てどう感じたかをまとめた。節分やクリスマスの翌日には、恵方巻きやクリスマスケーキの大量廃棄が行われている現実を見て、なぜこのようなことになっているのか、どうしたら廃棄を減らせるのか、自分自身ができることをシェアするグループワークをした。3年生での食生活分野で環境の学習に繋がりたい。</p>		



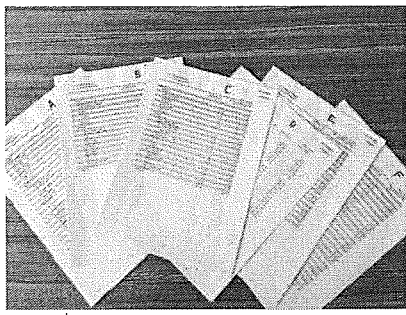
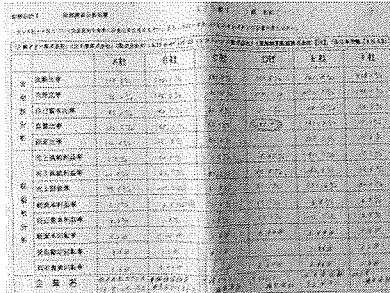
教科	商業	科目	ビジネス基礎
日時	9月25日(金) 3限目	学科・学年	商業科・1年
内容	<p>金融業の業務内容について授業を展開する中で、銀行の業務内容を考えるという視点から、バングラディッシュにおける「グラミン銀行」の活動に触れた。生徒は、インターネットを活用しパワーポイントのスライドに指定されている各項目について調べ学習に取り組んだ。その中で、SDGsで掲げている17のテーマの観点を意識した活動をおこなった。</p>		

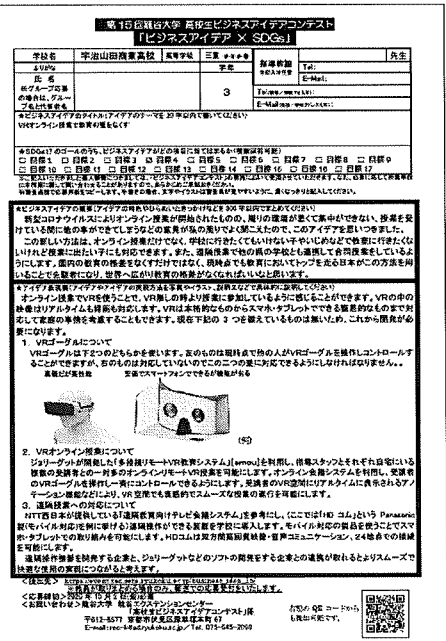
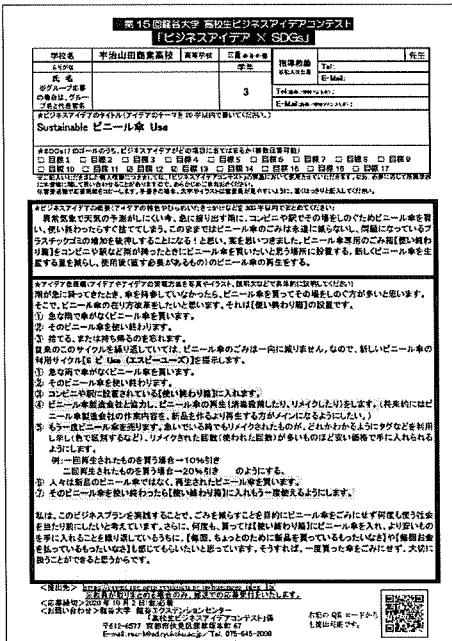



グラミン銀行の課題

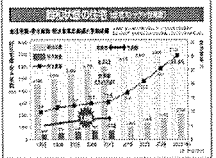

- ① 多重債務問題にどう対応するか?
お客さんを返済不能な状況に陥れてしまう大きな問題。
- ② 女性への貸付は女性をエンパワーするか?
途上国、新興国の女性には強や寡弱でても忙し、そこに更に資金管理という仕事加わって、負担になってしまふ危険。
- ③ グループ連帯保証制度と地域コミュニティについて
返済保証制度では、万が一誰かが債務不履行に陥った場合、その人の債務を誰かがカバーしなければならぬため、グループの中での不信が生まれてしまう。グループ連帯保証制度はコミュニティのつながりを強めてしまう可能性もある結果の弊である。

教科	商業	科目	ビジネス基礎
日時	6月・10月	学科・学年	国際科・1年
内容	<p>経済活動の際に、個人の欲求を満たすことや利益の追求だけでなく、社会貢献や環境保護の視点にたつて SDGs を意識しながら考えられるような基礎を養いたいと思い、次のような活動を行った。</p> <p>【6月】 経済活動の基本的な考え方を学習する際、生産要素の希少性について、SDGsを取り入れながら学習した。SDGsについて知らない生徒もいることが予想されたので、SDGsについて調べ学習を行った。</p> <p>【10月】 小売業について学習する際、商店街の衰退傾向が問題となるなか、復活を遂げている例について調べた。その際、SDGsの側面からどのように考えるかを示すために、テレビ番組を視聴した。</p> <p>資料: YouTube 配信【アニメでわかる! SDGs】 BS朝日【ボタンタッチSDGsはじめてます】</p>		

教科 日時	商業 11月27日(金)6限目	科目 学科学年	財務会計Ⅰ 商業科経理コース・2年
内容	<p>金融庁 EDINET から 6 社の財務諸表（貸借対照表・損益計算書）を取得。コロナ禍における企業の状況を知り考察するために、会計期間は今年度四半期（4月1日から6月30日）のものとした。</p> <p>各会社名を提示せず、各班（5～6名）でA～F社の経営分析を行い、企業名を考えていく。</p> <p>教室に設置してあるプロジェクターによって各会社の HP の IR 情報を表示し、各会社が取り組む SDGs 事業についても確認していった。経営分析をするなかで、社会の課題を解決することが企業の利益にどう反映されていくのかを話し、次年度の財務会計Ⅱ・課題研究の授業へつなげていった。</p>		
			

教科 日時	商業 8月～10月	科目 学科学年	課題研究（ビジネスプランコンテスト） 全学科・3年
内容	<p>「2020年度プレゼン龍×SDGs 第15回龍谷大学高校生ビジネスアイデアコンテスト」に個人で応募。</p> <p>今回のコンテストのテーマは「ビジネスアイデア×SDGs」であり、SDGsを見据えた社会問題を解決する斬新なアイデアを募集。</p> <p>講座受講生徒25名それぞれが、SDGsについての知識を深めながらより良い社会を目指すためのアイデアを考えコンテストに応募した。</p>		
			

教科	商業	科目	ビジネス経済応用
日時	9月23日(水)1・2限目~11月27日(金)	学科・学年	商業科マーケティングコース・2年
内容	中小企業庁の令和2年度「地域・企業共生型ビジネス導入・創業促進事業(地域・社会課題の解決支援)の起業家教育事業」に参加。 起業家教育でビジネスプランを考える際にSDGsの観点を入れたプラン作成。 11月18日(水)最終発表会 審査員にエイチエムプロデュース濱地雄一朗様 鈴りん探偵舎取締役奥山夢菜様に来校いただき 審査・アドバイスを頂きました。		

教科	商業	科目	課題研究(地域活性化プロジェクト)
日時	10月26日(月)2限目~11月30日(月)	学科・学年	全学科・3年
内容	中小企業庁の令和2年度「地域・企業共生型ビジネス導入・創業促進事業(地域・社会課題の解決支援)の起業家教育事業」におけるJapan Challenge Gate 2021~全国ビジネスプランコンテストへの参加。 起業家教育でビジネスプランを考える際にSDGsの観点を入れたプラン作成。		<p>悩み共感</p> <p>過去10年で空き家は約90万戸増！他人事ではない「空き家問題」の現状</p> <p>新築で綺麗な家の隣に、瓦の木や雑草が伸び放題で誰も住んでいない家が並び、一度はこんな光景を目にした経験がある人も少なくないのではないでしょうか。</p>  

(2) 学校運営におけるSDGs啓発の取組

SDGsに関する授業を実施するほか、今年度は校務分掌ごとにSDGsの取組についてのポスターを作成し、校内の教員室の入口や廊下の掲示板に掲示することによって、SDGsに関する学習活動を学校全体の取組とした。



(3) 成果と課題

今年度は、各教科において1年次の授業実践をもとにSDGsの視点を踏まえた学習内容は何かを再検討し、それに基づいた授業を各教科・科目で1回以上実施した。また、学校全体でSDGsを意識した生活を啓発する取組として、校内各所にポスターを掲示した。

次年度以降は年間をとおして、SDGsを核とするカリキュラム・マネジメントについて学習指導委員会と協議し、全教科・科目の連携を図りながら体系的にSDGsの知識を育成する必要がある。

1

2 図書館におけるSDGsへの取組

(1) はじめに

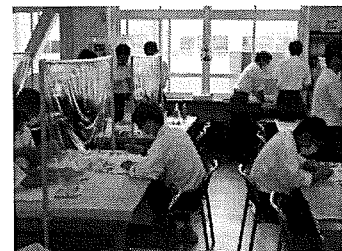
本校図書館において、毎年7月・9月(文化祭)・2月の年3回のイベントを実施し、図書館利用の促進を図っている。各クラスの図書委員2名により図書委員会が構成され、委員会活動によりイベントの企画立案や実施運営を行っている。

普段図書館を利用しない生徒に対して、イベントを通して図書館へ足を運んでもらい、図書館の利用や読書をするきっかけになればと、毎年実施しているが、本年度はSDGsへの取組を、学校全体で誰でもが参加できる形を作りたいと、7月と2月の2回のイベントを、SDGsを意識した取組とした。

(2) 図書館イベント(7月)

各クラス2名の図書委員からイベントに対する企画案が提出されたが、3年生からオリジナルエコバッグの製作という案が提案され可決された。

背景には、3年生は昨年度からSDGs教育を受け意識が向上していたことと、海洋プラスチックごみやプラごみが社会問



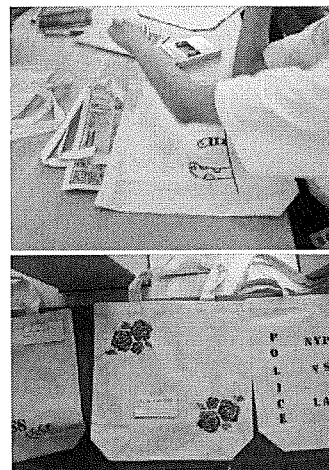
題化しており、7月からコンビニ等でもレジ袋が有償になったことが挙げられる。

7月の期末試験終了後の2日間に、放課後1時間程度のイベント時間を設け、図書館にあるデザイン集やイラスト集なども準備し、無地のエコバッグに布用のインクやペンなどを使って、参加者が思い思いの図柄でデザインしたエコバッグ作りを行った。

出来上がったエコバッグは、インクなどを乾かす意味も含め、図書館に展示し、イベント前後の時間に図書館を利用する生徒たちにも見てもらうこととした。

コロナ対策もあり、人数制限を行って実施したため、希望者全員が参加することは難しく、60名の生徒しか参加できなかったが、イベントは成功裏に終わることができた。

なお、イベント参加者にアンケート調査を実施したが、アンケート結果は以下のとおりである。



R2年度7月図書館イベント(オリジナルエコバッグを作ろう!)

参加者アンケート集計結果

質問番号/日 (アンケート 数)	22日(金) (20枚)		27日(月) (34枚)			28日(火) (4枚)		3日間の合計 (58枚)		
1	オリジナルエコバッグを作った感想は?									
	楽しかった	楽しくなかった	楽しかった	楽しくなかった	楽しかった	楽しくなかった	楽しかった	楽しくなかった	楽しかった	楽しくなかった
	17	3	29	5	3	1	49	9	0	
2	エコバッグ作りは難しかったですか?									
	易しかった	難しかった	易しかった	難しかった	易しかった	難しかった	易しかった	難しかった	易しかった	難しかった
	4	11	5	10	10	14	2	2	14	23
3	エコバッグを持つことの意味は理解していますか?									
	理解している	分からない	理解している	分からない	理解している	分からない	理解している	分からない	理解している	分からない
	16	4	25	9	4		45	13	0	
4	エコバッグ作りを通して環境に関する意識を持つことが出来ましたか?									
	出来た	ある程度出来た	出来なかった	出来た	ある程度出来た	出来なかった	出来た	ある程度出来た	出来なかった	出来た
	12	7	1	19	14	1	3	1	34	22
5	図書館では、SDGs等の関連書籍を準備していますが、知っていましたか?									
	知っている	知らなかった	知っている	知らなかった	知っている	知らなかった	知っている	知らなかった	知っている	知らなかった
	13	7	18	10	6	3	1	34	18	6
6	SDGsや環境問題を考えるイベントがまたあったら参加したいですか?									
	参加したい	参加したくない	参加したい	参加したくない	参加したい	参加したくない	参加したい	参加したくない	参加したい	参加したくない
	9	11	14	20	2	2	25	33	0	

(3) 図書館イベント(2月)

本年度はNPO法人を通して古本を全国の児童養護施設に届けるといった社会貢献活動を行うこととなった。例年は2月にイベントを計画しているが、1冊でも多くの古本を集めるため、3年生が自宅学習に入る前の1月に古本の回収を行い、2月に1・2年生の図書委員が古本の整理と梱包作業などを行い、NPO法人に引き渡すこととした。

2学期期末には、毎月発行している「図書館だより」をとおして、イベントの告知を行うとともに、ポスターの掲示を行って、年末の大掃除の際に古本を捨てずに、古本の回収に協力するよう求めた。その結果、目標の約倍となる1,147冊の古本が回収され、この数は生徒一人あたり約2冊の本を寄付したこととなり、一人一人の小さな善意が、大きな貢献になるといったことの証明となったように考える。

集まった古本は、NPO法人「全国成年後見の会」をとおして、全国の児童養護施設に寄付される。



(4) 取組の成果

SDGsへの取組をテーマとして、図書館でできることを考え、取組を行ってきたが、イベントに参加した生徒はもちろん、図書委員として活動してくれた生徒たちにとっても、一人一人のできることは小さくても、それが集まれば大きな力となるということが、証明

することができたのではないかと考える。

SDGsを学び、知識を習得しても行動を起こさなければ何も前には進まない。知っているだけではなく、出来ることは小さくても、行動できる力を身に付けてほしいと思っている。

(5) 今後の課題

図書館は、様々な分野の書籍が2万冊近く蔵書されており、一大情報基地と言ってよい場所である。また、新聞5紙を閲覧することができるが、図書館担当教員によって、新聞の切り抜きも行っており、書籍だけでなく最近の社会問題などを調べることも可能である。

授業利用も行っていただいているが、探求学習や調べ学習をはじめとした様々な学習場面で利用してもらうとともに、図書館をもっと身近な存在とし、生徒個人が、豊かな感性と正しい知識、様々な角度から物事を見る力などを、読書を通して学ぶ場として利用してもらえるように、図書館の整備を図っていきたいと考える。

3 進路指導部・小論文指導におけるSDGsの取組

(1) はじめに

本校では進学希望者が年々増え、7割近くを占めている。国公立大学や難関私立大学に挑戦する生徒も多く、大部分の生徒が資格等を活かした推薦入試を選択し、面接と小論文による受験となる。小論文指導は特定の教科の先生や一部の先生による指導ではなく、学校全体で小論文指導ができる仕組みが必要であり、10年前から「全職員による小論文指導」を行っている。

生徒が大学の過去問題等を元に小論文を書いてくると、進路指導部で先生を割り振り、添削指導を受け、再度進路へ報告にくる。ただ、評価に関して教員の基準にばらつきが出るため、平成26年度からは教員側の評価が統一されるように、評価手法にルーブリックを取り入れている。今年度は、進路指導部、学年、国語科で話し合い、生徒もより自己評価しやすいルーブリックに改訂した。

(2) 取組みの内容

小論文指導の1つとして、キッズコーポレーションのハイスクールタイムズを利用している。ハイスクールタイムズの記事から出された課題について、600字程度の小論文を書き、添削してもらうというシステムになっている。リライトはないため添削してもらった小論文を再度書いてくる場合は、全職員による小論文指導のシステムにより、各教員で指導を行っている。

3月からコロナウイルス感染症拡大のため休校になったが、小論文指導がストップしてしまわないように対策を行い、休校中の課題としてハイスクールタイムズの記事を利用した。



—今月号の課題— ハイスクールタイムズ Vol173 第15巻第4号

『国連が掲げる持続可能な開発目標「SDGs」とは読み、持続可能な未来を作るために、あなたが今日からできることは何でしょうか。17の目標すべてに関係することでも、そのうちの1つに関係することでも結構です。600字以内で述べなさい。』

試では、愛知学院大学経営学部経営学科の小論文試験において「持続可能な社会の実現について」（近年、持続可能な社会の実現に向けて企業は様々なことに取り組んでいるが、あなたが考える持続可能な社会とはどのようなものですか。また、経営学部で学ぶことが持続可能な社会にどのように役に立ちますか。できるだけ具体的に教えて下さい）が出題されている。

受験後には、小論文対策でSDGsについての課題に取り組んだことで意欲的に入試に挑めた等の報告があった。昨年度からの講演会やSDGs研修会等に参加することで得た知識を、小論文という形でアウトプットする機会により、さらに課題が明確化したようである。小論文指導は進路決定の1つの取組であるが、SDGsの課題を自分自身の問題として考えるきっかけになったはずだ。小論文対策では社会の課題を考え、自分の考えを述べていくことが必要になってくる。社会問題をSDGsと関連づけ、取り組んでいけるよう今後も継続して指導していきたい。

4 文化祭におけるSDGsの取組

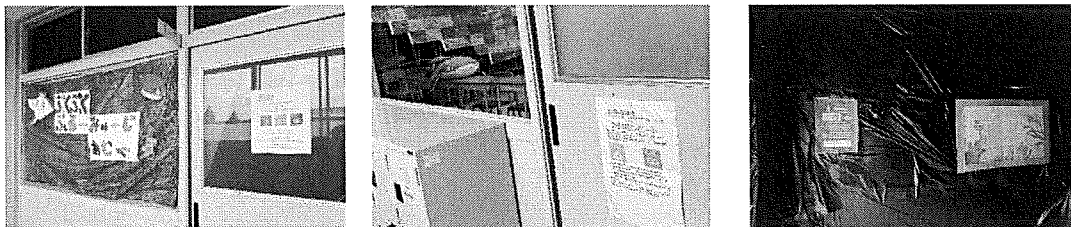
(1) 概要

生徒会が企画する文化祭において、今年度は感染症対策をとるとともに、SDGsをサブテーマとして、環境を配慮した取組などSDGsの視点で計画・準備・運営を行った。また、その中で特にどの目標やターゲットに注目し、どのように取り組んだのか、経過や状況、成果などをレポートにまとめ、クラス展示と共に掲示した。

(2) レポートの作成と展示

ア 文化祭当日

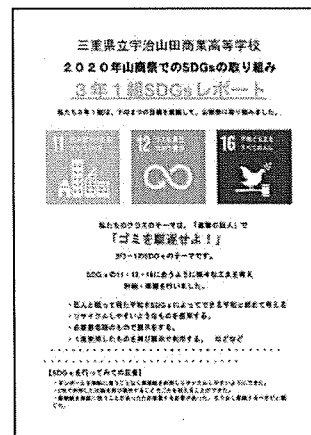
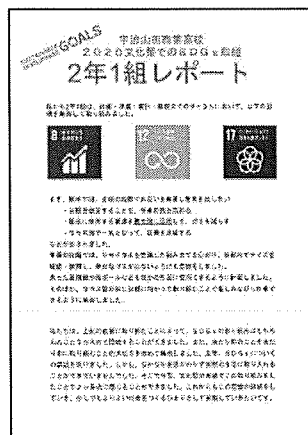
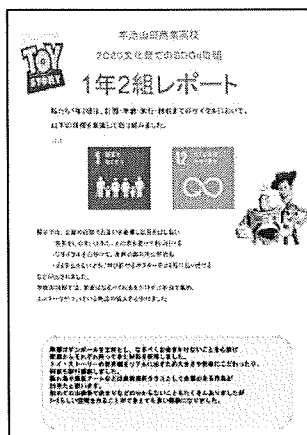
レポートには、クラス展示内容の説明をはじめ、特に注目したSDGsの目標やターゲットについて、また目標達成に向けた取組計画や工夫ポイントを記載した。それを教室の入口付近に掲示し、クラス企画のPRを行った。



イ 文化祭終了後

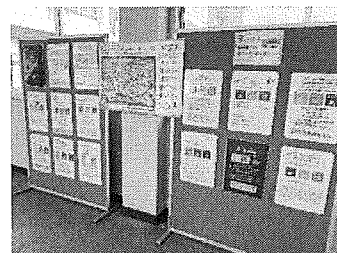
各クラスで企画・運営・後片付けまでの一連の取組を振り返り、感想や取組の成果をレポートに追記した。以下、感想の一部を紹介する。

- ・SDGsは自分たちの生活には、ましてや文化祭には、まったく関係がないと思っていました。しかし、思っていたよりも自分たちの生活の中でできることがあると知ることができ、よかったです。だから、これからSDGsを意識した生活を心がけたいです。



(3) 成果と課題

企画運営など生徒自ら考え行動する学校行事の中に「SDGsの視点で」というキーワードを取り入れることで、生徒はSDGsを自分事として捉える機会になったのではないかと考える。文化祭後、校内の渡り廊下に掲示板を設置し、全クラスのレポートを掲示した。この取組を一過性で終わらせない仕掛けが必要である。



5 「みえ国際ウィーク2020」SDGs研修

(1) 概要

ア 目的及び内容

国際的な共通目標であるSDGsの概念を学ぶことで、世界に目を向けるきっかけとする。レクチャー及びカードゲーム形式でSDGsについて基本的な知識を学ぶ。

イ 日時・場所

令和2年10月23日(金) 13:00~15:30

宇治山田商業高校 マルチメディア室

ウ 参加者

1年生1名、2年生29名、3年生5名

エ 主催者

三重県国際戦略課

共催：国際連合地域開発センター (UNCRD)

(2) 研修の様子

国際連合地域開発センター研究員の浦上様から、SDGsの基礎的な知識と概念についてお話を伺った。またカードゲームを通して、なぜSDGsが私たちの世界に必要なのか、そしてそれがあることによってどんな変化や可能性があるのかを体験的に学んだ。



(3) 参加生徒の感想

- ・支援の手を差しのべたくても、声を上げないと差しのべられない。あらためて自分からコミュニケーションをとることは大切だと思った。
- ・ゲームで、経済のカードを達成する事によって世界の状況の経済が成長すると考え、達成に努力していたが、一つの項目だけに重点を置くことは危険なことだと中間報告で知らされた。後半は、世界の状況を見て、社会の惨状を確認して報告制を変える必要があると感じ、全体的な社会貢献に重点を置いて行動した。
- ・世界の状況のバランスを全部偏りなく調節するのは難しかった。経済が成長しすぎていても環境に影響を与えてしまうことが増えるので、裕福すぎるのも社会に悪影響なのかなと思った。経済に偏ってしまうとゲーム中交換するとき、お金を必要としている人が少なく、交渉が大変だった。価値観の違いで社会の情勢がすごく変わってしまうので、Global issueを解決するのは他の国の人たちとの理解のし合いが必要だと思った。
- ・ゲーム内で前半と後半で意識することが変わるだけで社会のバランスがかなり変わっていたので、少しお互いを意識するだけで変化することが分かった。今まで1つの目標として考えていたけど、今回の研修を通して、それにつながる課題を考えることの大切さを学ぶことができてよかった。
- ・相手の話を聞く、自分のことを話す、お互いの状況を理解し合うという3つのこと

がとても大事だとわかった。

- ・自分が「何をもって満たされる」のかを知ることが大切だとわかった。
- ・「つながっている。私も起点。」だというフレーズが印象に残っている。世界規模の問題だが、知らぬ間に自分も起点であるということを実感することができた。

6 SDGs講演会

(1) 概要

ア 目的

SDGsを教育の場に導入されている講師を招き、SDGsについて話を伺うことで、これからの社会を支える若者としてSDGsを身近なものとして捉え、自分たちが実践できるものとして考える機会とする。

イ 日時・場所

令和2年11月17日(火) 5・6限目 各HR教室(オンラインにて)

ウ 講師

新渡戸文化高等学校 統括校長補佐 山藤旅間 先生

エ 対象者

全校生徒 592名

(2) 講演内容

この講演会の数日前に新渡戸文化高校が実施していた「三重県オンライン授業チャレンジ」で山藤先生が出会った三重県の漁師や医師などの話を伺い、三重には地元や町のためにという思いを持って活動している大人がいることを教わった。また、海外の事例やいくつかの動画を視聴し、SDGsを「知る」から「ちょっと行動する」ことの大切さを学んだ。

(3) 生徒の感想

<1年生>

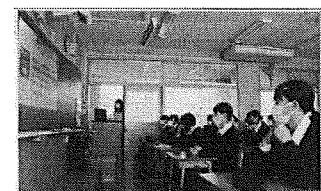
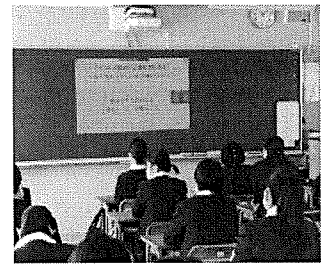
- ・自分の生活の中での当たり前が、他の国では当たり前ではないことを知った
- ・たった少しの変化や行動が、目標につながっていくことに気付いた
- ・自分には関係のない話だと思っていたけど、私たちにも責任というものがあから、未来のことを考えて生活していかないといけないなと思った

<2年生>

- ・今日の講演を聴いて、SDGsの目標を達成することだけじゃなくてSDGsを通過点としてその先を見すえた行動をしていくことが出来れば良いなと思いました
- ・授業でSDGsに関することをしていますが、前よりもっとSDGsについて日常的に考えるようになりました
- ・SDGsの学習を通して自分が学んだことを、知らない人に伝えることも自分たちの役割だと感じました

<3年生>

- ・まずは身の回りのことや私たちの住む町について知ることが大切
- ・現在の利益だけでなく、未来の利益も考える
- ・全て肯定し受け入れるのではなく、疑問を持ち、新しく提案するなど、積極的な姿勢であることが大切
- ・SDGsを手段に色々な人々とつながっていきたい
- ・国語の授業でも未来への責任という評論を勉強しました。未来への責任では現代人と未来世代が有限な資源を奪い合っている関係を回避しなければいけないということで、そのためにも持続可能な地球に向けて、現実的なシナリオを作らなければいけない。私たちが講演等を通して、未来についてのことを考えて行動できるようにならなければいけないと思いました。



第2節 SDGs 探求プログラム

1 課題研究 概要

令和2年度の開講講座のテーマ、育成する力、取組内容、受講人数は以下のとおりです。

テーマ	育成する力	取組内容	受講人数
地域活性化プロジェクト	問題発見能力・問題解決能力・コミュニケーション能力・ファシリテーション能力	地域活性化への取り組みとして、高柳夜店（山商の日）、キッズビジネスタウン、伊勢市民病院祭において企画運営など、イベントをプロデュース	25
商品開発プロジェクト	想像力・企画力・具現力・表現力・コミュニケーション能力	地元の食材や特産品を使ったオリジナル商品開発を立案し、地元企業に提案することで製品化を目指す	25
地域ボランティア	ボランティア精神・ノーマライゼーションの理念	NPO法人ステップワンとの交流をはじめ、ボランティア団体のイベント等へ参加（英語ボランティア etc）	22
ネットショップ	起業家精神・コンプライアンスの精神・表現力・コミュニケーション能力	「山商ネットショップ」を開設し、商品選びから商品発送までを実取引により事業主を体験	25
日本経済学	現状分析力・問題発見能力・表現力・論理的思考能力	日本経済が抱える問題についてグループ討議等を行い、多方面からその問題点や解決策を考え、小論文やレポートにまとめることで自らの考えを表現する	16
ビジネスプランコンテスト	発想力・企画力・表現力・コミュニケーション能力	日本政策金融公庫のビジネスプランコンテスト、マイナビのキャリア甲子園、関西大学KUEなど各ビジネスプランコンテストに参加して、全国大会出場を目指す	25
財務分析	分析力・数的処理能力・発想力・説得力	ビジネスゲームを通して、経営判断が財務諸表に与える影響を学んだ後、実際の財務諸表から経営における改善点を提案	9
未来の教室	柔軟性・課題解決・コミュニケーション能力	経済産業省と三重県教育委員会が連携した事業に参加し、次世代人材教育のプログラムを行う。Ma a Sを担うスキルの基礎となるSTEMS教育のプログラム探求	22
観光とビジネス	発想力・企画力・課題解決・ビジネスコミュニケーション能力	地域の観光資源を研究し、地域の活性化・観光資源の再開発、エコツーリズム・グリーンツーリズムを踏まえた情報の発信を目標とする	25

なお、各講座の1年間の取組状況は以下のとおりです。

(1) 地域活性化プロジェクト

ア 育成を目指す資質・能力

問題発見能力、問題解決能力、協働する力、情報の再構築など新しい価値の創造
イ 目的

若い高校生の活力で地元地域を活性化していくプロジェクトを自ら考え発信して行く。地元の課題・問題に目を向けて、商業の視点で考え望まれるニーズに対応した形で地域に貢献する。新しい事柄に積極的に挑戦し、地域との繋がりを作り問題解決にあたる力を養い将来地域を担う人材の育成を行う。

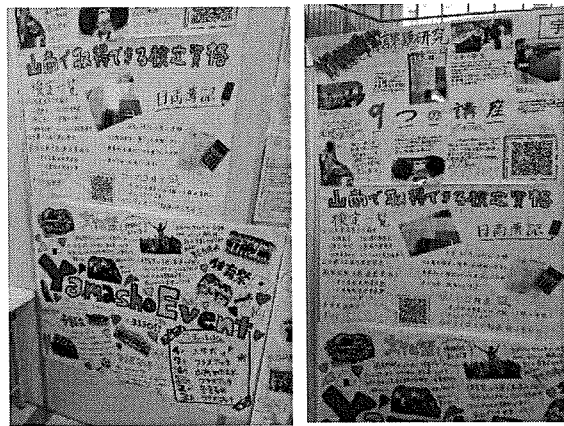
【1学期】コロナ禍の1年になり、従来の地域商店街の夜店への出店ができなくなり、自分の地域の魅力を再発見し、発信するための動画を撮影編集した。



どの地域の作品も、多くの地元の方に支えられて、取材協力、インタビューなどが行えた。

高校生が地域に目を向けて行動する事の価値を再確認できた。

【2学期】産業教育フェアに参加。宇治山田商業高校での学習成果を県民にアピールした。また、中小企業庁令和二年度起業家育成事業の一環の「全国ビジネスプランコンテスト」に参加した。(イオン津ショッピングセンターに展示)



【3学期】

1年間を振り返り、課題研究発表会の資料を作成。課題研究の授業ないでの発表を行い、ブラッシュアップして本番を迎える。

来年度についても、前年度のようなイベントへの参加は難しいと思います。与えられた条件の中で、地域にとって自分たちが出来ることを柔軟に模索していく予定です。

(2) 商品開発プロジェクト

ア 目的

8年前より地元企業の協力のもと、伊勢志摩地域の地場産業である第1次産業や観光業の活性化を目指し、地域の食材を使った商品開発を行っている。生まれ育った伊勢志摩地区の良さを、調べ学習を通して再確認し、地元愛を深めるとともに、生産者の生産物に対する拘りや思いを消費者に届けられる商品開発を目指している。

また、オリジナルの商品を開発することは決して容易いことではなく、発想力や想像力が必要であり、様々な発想法を学びながら、アイデアを創出し、試作・試食を通して、消費者に受け入れられる商品であるかを検証することで、アイデアを具現化する難しさを体験する。

消費者の立場から生産者の立場へと異なる立場を経験し、製品が商品として販売されるまでの苦労や工夫を、体験を通して商品に対する認識を変え、物事を多角的な視点で見ることが出来る力を養う。

イ 取組の内容

【1学期】

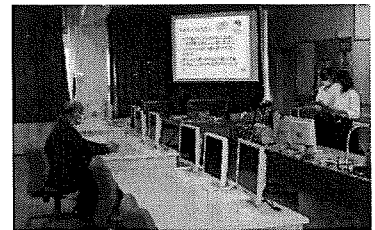
商品開発において、アイデアを創出する発想力や想像力は重要であり、身近な普段の生活の中や、ちょっと視点を変えることで、すでにある商品であっても、オリジナルの商品となる場合がある。本学期では、オズボーンのチェックリストを活用して、多角的な視点の重要性を学ぶとともに、前年度の開発商品3点（あかもくコロッケ、あおさふりかけ、ミルクレープ）についてのマーケティングを考案することを中心に授業を展開していった。あかもくコロッケのパッケージ作成では、ブレーンストーミングやKJ法を活用し、自分たちのアイデアをまとめていった。また、私たちが「あかもく」についての知識が少なかったため、地元食材の調査も同時におこない、栄養面などメリットといった食材の魅力について再発見することができた。

【2学期】

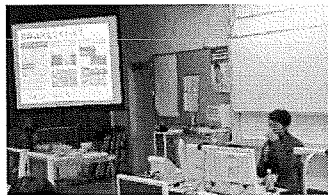


あおさふりかけについて、夏季休業中にふりかけを活用したレシピを各自考案し、9月に調理実習をおこなった。

料理写真とレシピを掲載した宣伝用のチラシを作成し、企業にプレゼンをおこなった。その後、講師の方から商品開発のポイントについて講演をいただき、商品売っていくためには常に消費者目線を忘れず挑戦する意欲を大切にしていかなければならないこと、自分たち本位の商品開発では決して良い商品とはならないことを指摘していただいた。



プレゼンテーションの様子



11月の講演会の様子

11月には、本校のOBであるエイチエムプロデュースの濱地雄一郎さんより地元地域の魅力について活動事例を中心に講演していただいた。伊勢志摩地域の取り組みを知る中で、発想力と行動力の重要性を学ぶことができた。

【3学期】

1年間の振り返りとまとめを兼ねて、課題研究成果発表会へ向けてプレゼンテーションの準備を行った。要点を整理し、聞き手に効果的に伝えられるために、班内にて意見を出しながら講座の魅力伝えていく。

ウ 学習の成果

商品企画について、①ターゲットをどう設定するのか ②消費者目線で考えた際に、どのような工夫をすると購買意欲を高められるのかといった内容を、講演を中心に学習することができた。一つの商品を販売するために、開発だけではなく、いくつもの行程をふまなければならないこと、それぞれの企業が協力して私たちが手にしている商品は提供されていることを体験できた。

エ まとめ

商品企画を中心に学習し、昨年度の商品提案から今年度は商品化を実現するところまで進展することができた。来年度の受講者には、※「商業高校フードグランプリ」に出場しこれまでの活動の集大成として取り組んでほしい。

※商業高校フードグランプリ…伊藤忠食品が主催する大会で、高校生が地元の食材を活用してメーカーと開発した商品を募集している。エントリーを通じて継続的に流通・販売可能な商品の条件や課題を学ぶことで、商品の改良や次の商品開発に活かし、地域食文化の継承に寄与することを趣旨としている大会。予選を通過した高校が決勝となる本選に出場する。



(3) 地域ボランティア

ア 育成する力

ボランティア精神の涵養、ノーマライゼーションの理解

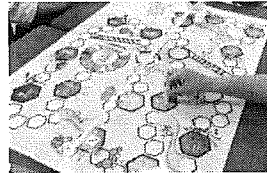
イ 取組内容

【1学期】

・各自がボランティアに関するテーマを1つ選んで、レポートを作成。注1 CRM、注2 ノンテクニカル・スキルの学習を経て、選んだテーマごとに班を作り、調べ学習と発表

を行った。(注1: CRM (クルー・リソース・マネジメント) とは、航空業界において開発された技法のこと。積極的なコミュニケーションにより、チームが協力して、エラーの発生を少なくしようとする活動と技術のこと。)(注2: CRM に活用される技術で、5つのスキルで構成されている。)

- ・SDGsについて、「ゴー・ゴールズ」を使用し、学習。
- ・各自の調べ学習のテーマが、SDGs 17の目標のうち、どれに関係しているかを考える。さらに、教材として「未来の授業 私たちのSDGs探求BOOK」による「日本が抱えているこれから解決すべき課題たち」から2学期の調べ学習のテーマを選ぶ。



ゴー・ゴールズ



班ごとの調べ学習
* 発表資料は壁新聞として掲示

【夏休み中】

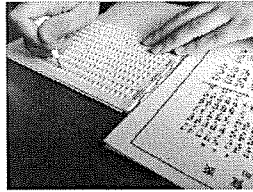
- ・2学期の調べ学習のテーマについて、一緒に調べる仲間を募るためのプレゼンテーションの準備をする。

【2学期】

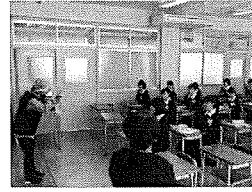
- ・各自プレゼンテーションの準備と発表。プレゼンテーションにより集まった仲間とともに、改めて「日本が抱えているこれから解決すべき課題たち」からテーマを決め、調べ学習を行う。後日発表。
- ・校外学習として、防災センターにて、いのちをまもることについて学習する。
- ・SDGsについて資料映像鑑賞。
- ・外部講師による講座4回実施。①ボランティアについて②点字学習③障がい者サポーター研修と手話講座④福祉車両体験
- ・年度末の課題研究発表会向けのプレゼンテーションの資料づくり



防災センター



点字学習



手話講座



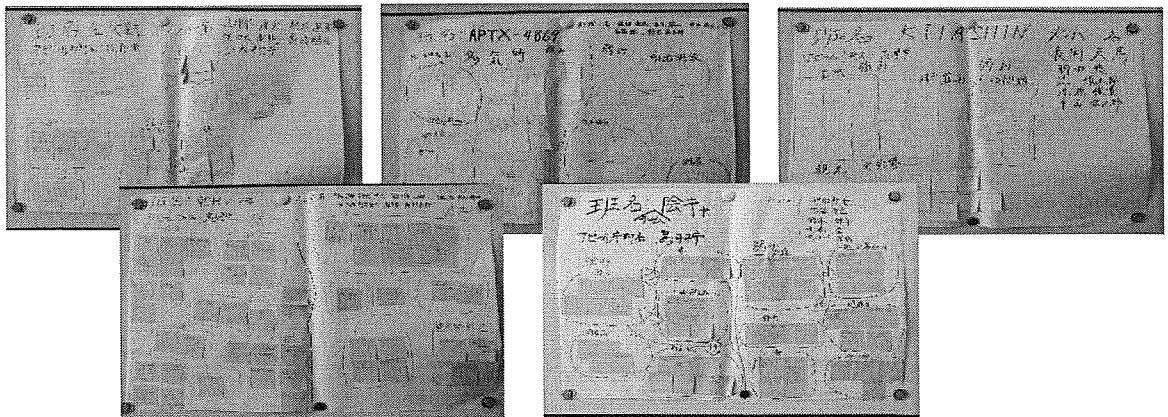
福祉車両体験

(4) ネットショップ

- ア 育成する力
起業家精神・コンプライアンスの精神・表現力・コミュニケーション能力
- イ 取組内容

「山商ネットショップ」を開設し、商品選定から受注・商品発送までを実取引により事業主を体験。

【1学期】地域の観光資源を調べ、SDGsの考え方で持続可能な地域の活性化や観光資源の再開発、調査・研究した結果を発表した。5人/1グループ: 5グループに分かれて発表した。



【2学期】2学期は、今年度はグループを1学期のままの班構成で5人/1グループでネットショップでの取り扱いたい地元の商品を選定。実際に感じて事業所に電話をして取引のお願いの交渉や取引条件などの交渉を行いました。また、「商品開発プロ

「プロジェクト」が開発した商品を取り扱っています。
(今年度取り扱った商品)



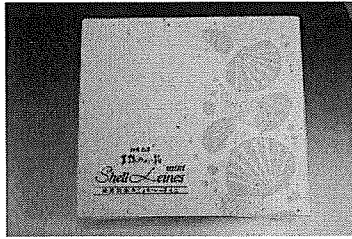
絲印煎餅



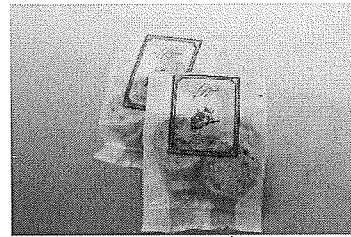
伊勢海老せんべい



ひじきうどん



真珠の小箱



アオサブレ

- ・開発商品・・・今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、4月・5月に商品開発チームの授業が出来なかったため販売出来ませんでした。
- ・販売期間・・・11月1日から30日まで（1か月間）

ウ まとめ

今年度も、ネットショップ開設の宣伝がうまく行かず前年に比べてさらに注文や問い合わせが非常に少なかった。また、取引をお願いした取扱商品については、ほとんど注文がない状態であった。次年度以降、ネットショップのPR方法等も考える必要がある。また、例年人気のある塩バニラアイスなどの販売ができなかったため売り上げにかなり影響しました。取扱商品の選定でも価格設定、商品認知などのさまざまな部分に考慮する必要がある。

(5) 日本経済学

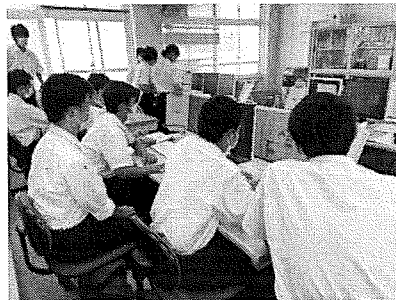
ア 育成したい力：

- ・持続可能な社会づくりを意識し、経済活動を通じた課題について考え対応していく力。
- ・資料を要約する力を養い、大学入試等に活用していく。

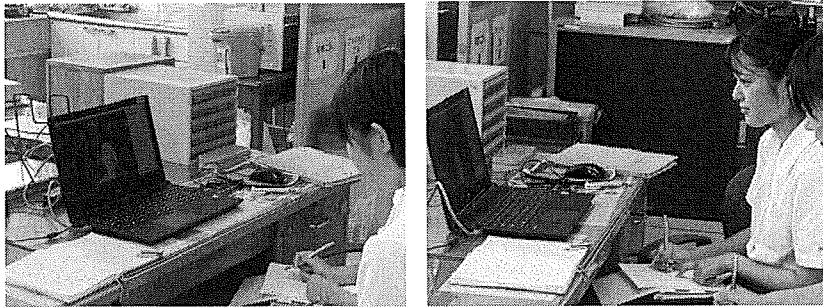
イ 取組内容：

- ・「日誌」→経済に関する新聞記事を要約し、自分なりの視点で社会の課題について考えられるようになる。
- ・「小論文コンクール等への応募」
「NRI学生小論文」「金融と経済を考える高校生小論文コンクール」等
- ・「日経ストックリーグへの参加」 → 模擬投資活動を通して、経済感覚を磨く。

—企業のSDGsの取組を通して、経済活動について考える—



ーレポート作成のために企業への取材ー



今年度は Zoom を利用し、「志摩観光ホテル」「モクモクファーム」に取材を行いました。
・その他にも、テーマ設定を行い班別に探究した内容でのプレゼンテーション、
講座独自の小論文課題など大学進学に向けた準備も同時にしてきました。

(6) ビジネスプランコンテスト

ア 育成する力 プレゼンテーション能力・表現力・協調性・想像力・発想力

イ 取組内容 コンテストに応募し、全国大会出場を目指す
本年度参加したコンテスト

目指せ全国大会!

10月 【第15回 高校生ビジネスアイデアコンテスト（主催：龍谷大学）】個人応募
本年度のテーマを「ビジネスアイデア × SDGs」と掲げ、「誰一人取り残さない”持続
可能な社会”の実現に向けたビジネスアイデアを募集。

12月【キャリア甲子園（主催：株式会社マイナビ）】チーム応募

高校生がチームを組んで企業・団体からの課題に挑戦するコンテスト。答えのない
課題に対して仲間と協力して調査し、議論し、仮説を立て、試行錯誤の末にアウトプ
ットする。そしてそれを第三者に評価してもらい、結果が出る。決勝戦の舞台は東京！
そしてその様子はインターネット生中継！！

★総合優勝チームには100万円分の海外旅行研修ツアー贈呈★

◎ チーム「横綱」が書類審査・動画審査を突破し、2月14日(日)オンライン開催の
準決勝大会に出場！

日本ユースホステル協会の出題テーマに対し、離職率の低下・地域活性化・衰退産業
へ新たな人材を引き込む架け橋となる職業体験型の新しい旅『Job旅』を提案。

※コロナの影響により昨年とは違う流れになっています

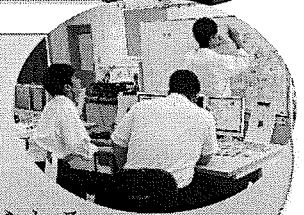
昨年：6月 関大 KUBIC、10月 高校生ビジネスプラン・グランプリ、
11月 33FG ビジネスプランコンテスト、12月 キャリア甲子園

<主な授業内容>

- ・ ビジネスアイデアの考え方や SDGs などの講義・学習
- ・ 応募する企画（ビジネスプラン）の考案
ブレインストーミング→テーマ決定→内容を議論
→プレゼン発表→フィードバック→ブラッシュアップ
これらを繰り返し行う
- ・ 各コンテストへエントリー
- ・ プレゼン発表は相互評価とルーブリックによる教員評価



教員側から SDGs の観点を取り入るよう促さずとも、生徒自ら
SDGs を意識してビジネスプランを考える傾向が見られた。
この傾向は、2年次より SDGs の学習に取り組んでいる成果と
考えられる。また、企業側が SDGs への取組みをアピールして
いることも、生徒が SDGs に関心を示すことに繋がっていると考えられる。



◆これまでの実績◆

<2018年度>

キャリア甲子園初挑戦にして、チーム CHOROLOPLAST が初の準決勝大会出場。

ZOZO テクノロジーズからの課題に対し、新ブランド『JENNIFER; (ジェニファー)』を提案。部活動などで忙しい高校生の 10 年後のファッションとエシカル消費の促進による諸外国の雇用問題を同時に解決するビジネスプランを考えた。

キャッチコピー「JENNIFER; で 10 年後の高校生が衣武両道と社会貢献を同時に簡単に実現」

服を買い、
ファッションを
楽しむ行為で簡単に
社会貢献 : -0



<2019年度>

三十三総研主催「33FG ビジネスプランコンテスト」にて初応募でチーム nolimit が優秀賞に輝いた。自転車を漕いでできるエネルギーを電力に変え、携帯の充電や災害時に役に立つ機械、エネルギーを健康管理に役立てるアプリ、エネルギーのポイント化などのアイデアを提案。地域経済波及効果・社会貢献度として、伊勢市のレンタサイクルとコラボすることで自転車での伊勢の街の気軽な散策を可能にし、これまで知られていなかった伊勢の魅力をもっと広め、その地域への観光客の増加をアピールした。

(7) 財務分析

- ア 育成する力
- イ 取組内容

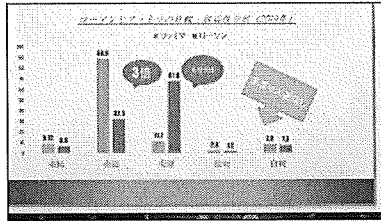
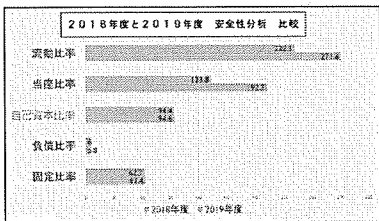
分析力・数的処理能力・発想力・説得力

ビジネスゲームを通して、経営判断が財務諸表に与える影響を学んだ後、実際の財務諸表から経営における改善点を提案。

【1学期】決算書の読み方を復習、プレゼン資料の作成方法、決算書の2期比較実習

【2学期】各自で企業を選び決算書を分析、講座内で発表・意見交換
・財務諸表分析の教科書作成

ウ 生徒作品



〈まとめ〉

- ・安全性が高いかどうか判断するためには、全ての指標において数値が安定しているか急激な成長が起っていないかを確認する。
- ・数年分を比較することが大切



成長性分析は企業の“これから”を明確に数字で表すことが出来ます。ぜひ活用してみてください。

(8) 未来の教室

- ア 育成する力
- イ 取組内容

柔軟性・課題解決・コミュニケーション能力

経済産業省と三重県教育委員会が連携した事業に参加し、次世代人材教育のプログラムを行う。

MaaS (モビリティ アス サービス) を担うスキルの基礎となる STEAMS 教育のプログラムの探求。

※STEAMS教育とは

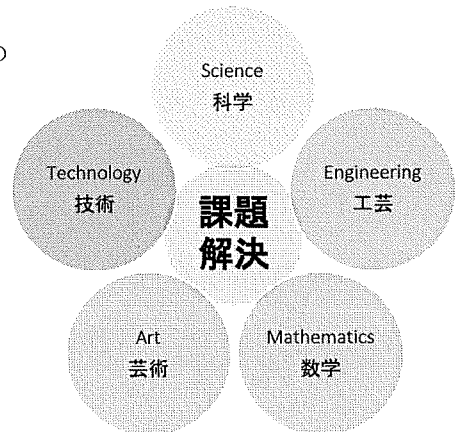
Science, Technology, Engineering, Art, Mathematics 等の各教科での学習を実社会での問題発見・解決にいかしていくための教科横断的な教育

【1学期】

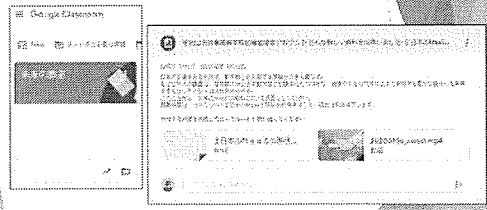
新しいモビリティの活用方法を考えた、新たなサービスを創造し、企業に向けた提案を行うためのプレゼンテーションを制作しました。その中には、SDG's の視点も取り入れ、社会における課題も学習しました。

【2学期】

授業の進め方は、「Google Classroom」を活用して、課題や映像教材を配信し、各グループがそれぞれに取り組みます。1学期の取り組みを基にして、MaaSに



授業の進め方



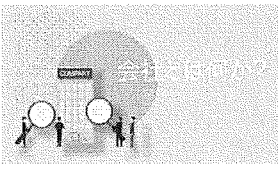
今年度は、映像教材もグレードアップして、「起業家ゲーム」では、各グループが考えた新規ビジネスを、プレゼンテーションし、外部有識者に評価してもらい、その結果とAIによる将来価値を考慮した企業価値の算出を行いました。

コンピテンシープロフィール

【影響力の行使、現代の課題】
 影響力の行使とは、他人の行動や考えを自分の意図する方向に変えることである。現代社会では、個人や組織が持つ影響力は、社会の発展や課題の解決に大きく貢献している。この影響力を効果的に行使するためには、信頼を築くことや、適切なコミュニケーションを行うことが重要である。また、影響力を行使する際には、相手の利益や価値を尊重し、透明性を持って行うことが求められる。本教材では、影響力の行使の重要性や、効果的な方法について詳しく解説している。また、実践的な事例やケーススタディを通じて、影響力の行使のスキルを身につけることができる。本教材は、ビジネスリーダーや社会活動家にとって、非常に有用なツールとなること間違いなしである。

対する日本の現状と世界の状況を学び、高校生の視点による新たなビジネスを考えることで、創造力や課題の設定、ステークホルダーへの意識など、ビジネスシーンにおいて必要となる課題設定能力・コミュニケーション能力の向上を図りました。

あなたは起業家。会社の価値について考えよう
 「会社とは？」



本日の目標：会社とは何かを考え、会社の価値の重要性を認識しよう
 前週を振り返るポイント！
 1. 会社とは何か？
 2. 会社の価値を高めるための方法が？
 次のページの作業を確認しよう

○数値化できない自分の能力を可視化する評価測定ツール「AiGROW」を使用して、自己評価だけでなく他者からの評価も併せて分析された測定結果から、自分を再確認することを行います。測定は、受講する前と後で行い、学習を通して成長した自己の資質を確認します。

(9) 観光とビジネス

ア 目的

SDGsの理念に基づいた、自然資源を生かしたグリーンツーリズムなどを利用し、地方創生を目指した取り組みを学ぶ

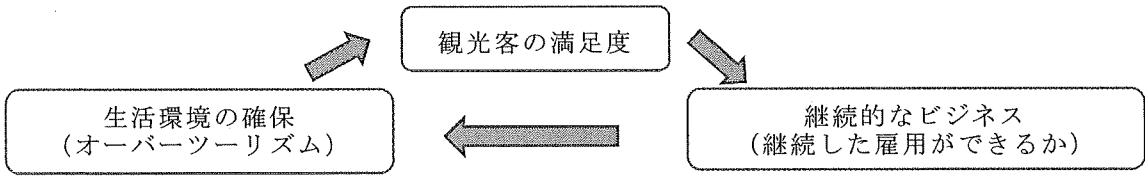
イ 内容

(ア) 調べ学習

「SDGs」、「エコツーリズム」や「グリーンツーリズム」について各自調べ学習を行い、休業明けに班ごとに発表会。

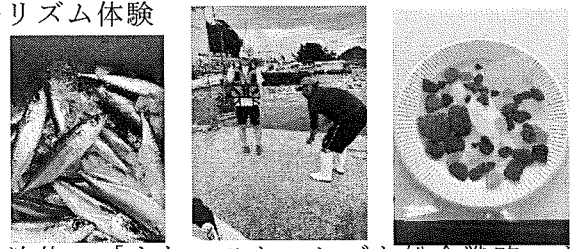
(イ) 観光について

観光にかかわるさまざまな産業（宿泊、商業施設、公共交通機関、農業、漁業など）、特にインバウンド産業（訪日外国人の旅行消費額は4.4兆円）について学び、外国人は観光地巡りだけでなく、布団で寝る、箸を使う、田植え体験等も新鮮な魅力であることを知った。またコロナの影響でインバウンドが減少するなか、マイクロツーリズム（近場の旅行）が人気であることをしり、地元の魅力を再発見することとした。また、持続可能な観光について「顧客満足度」と「継続的な利益が見込めるビジネス」と「観光地の生活環境の確保」について考えた。



(ウ) 答志島（鳥羽市）にてグリーンツーリズム体験

- ・釣体験
- ・島路地裏散策
- ・シーグラスアクセサリ作り体験
- ・干物づくり体験



(エ) 株式会社JTBコンペ

・伊勢志摩地域の「自然」、「食」、「文化」、「歴史」を班ごとに調べた
 ・それぞれ興味のある地域について各自自治体の「まち・ひと・しごと総合戦略」を調べ「地域調べ」を行った。コンペはパワーポイントを用いて旅行コンテンツやプランについて提案

2 課題研究「商品開発」 ～ 地元食材を活用した持続可能な商品開発を通じて ～

(1) 授業の目的

8年前より地元企業の協力のもと、伊勢志摩地域の地場産業である第1次産業や観光業の活性化を目指し、地域の食材を使った商品開発を行っている。生まれ育った伊勢志摩地区の良さを、調べ学習を通して再確認し、地元愛を深めるとともに、生産者の生産物に対する拘りや思いを消費者に届けられる商品開発を目指している。

また、オリジナルの商品を開発することは決して容易いことではなく、発想力や想像力が必要であり、様々な発想法を学びながら、アイデアを創出し、試作・試食を通して、消費者に受け入れられる商品であるかを検証することで、アイデアを具現化する難しさを体験する。

消費者の立場から生産者の立場へと異なる立場を経験し、製品が商品として販売されるまでの苦労や工夫を、体験を通して商品に対する認識を変え、物事を多角的な視点で見ることが出来る力を養う。

(2) 取組の内容

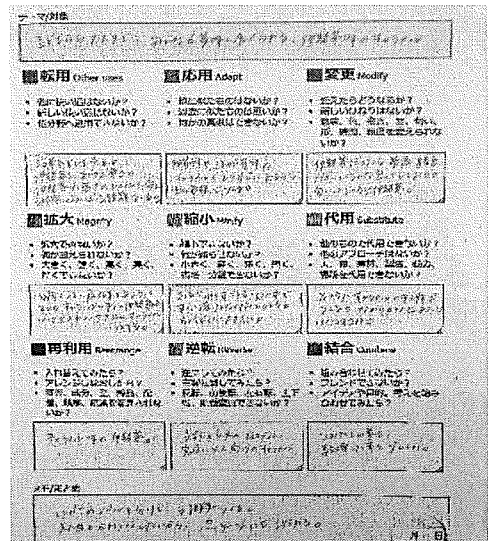
昨年度、提携企業への商品提案を実現することができたが製品化までの取組をすることができなかった。本年度においては、製品化に向け様々な企画・提案をおこなった。

ア 1学期

(ア) 本学期では、商品開発についての基礎的なプロセスについて、マーケティングを中心とした学習をおこなった。

アイデアを創出する発想力や想像力は重要であり、身近な普段の生活の中や、少し視点を変えることで、すでにある商品であっても、オリジナルの商品となる場合がある。

今回は、オズボーンのチェックリストを活用し、多角的な視点の重要性を学ぶとともに、前年度の提案商品3点（あかもくコロッケ、あおさふりかけ、ミルクレープ）についてのマーケティングを考察することを中心に授業を展開した。

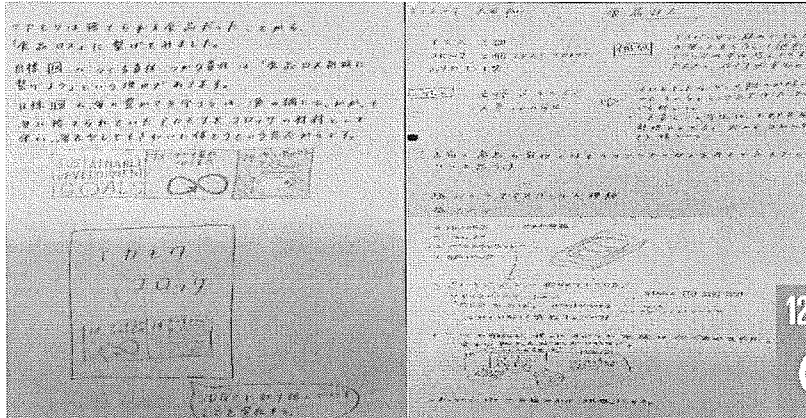


(オズボーンのチェックリスト)

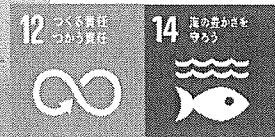
(イ) あかもくコロッケのパッケージ作成では、ブレンストレーミングやKJ法を活用し、

アイデアをまとめていった。また、生徒達においては「あかもく」についての知識が少なかったため、地元食材の調査も同時におこない、栄養面のメリットなど食材についての理解を深めることができた。

調べていく中で、なぜ先輩方が「あかもく」に着目したのか、その背景にはSDGsの考え方があったこと、17ある目標に私たちはどのように関わることができるのか、講座内で議論を交わし2学期以降、目標項目の12・14を意識して行動に移していこうという結論となった。

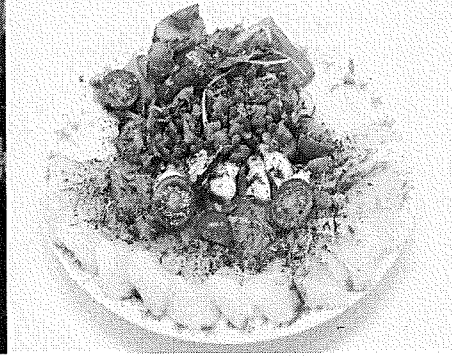


(地元食材の調査シート)



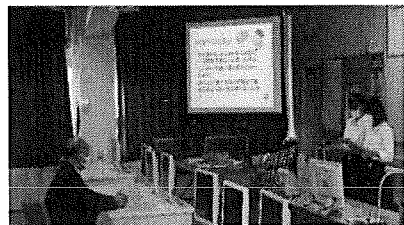
イ 2 学期

(ア) あおさふりかけについて、夏季休業中にふりかけを活用したレシピを各自考案し、9月に調理実習をおこなった。その際、食材写真を撮るなど、消費者の購買意欲をいかに高められるかといったことを学んだ。



(調理実習・食材写真撮影の様子)

- ① 料理写真とレシピを掲載した宣伝用のチラシを作成し、企業にプレゼンをおこなった。その後、講師の方から商品開発のポイントについて講演をいただき、商品売っていくためには常に消費者目線を忘れず挑戦する意欲を大切にしていかなければならないこと、自分たち本位の商品開発では決して良い商品とはならないことを指摘していただいた。

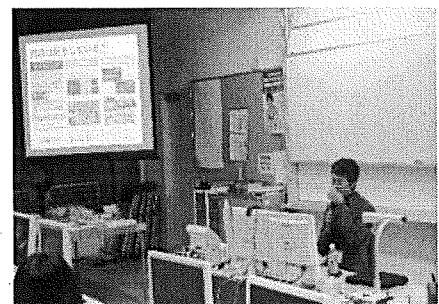


(プレゼンテーションの様子)

～講演会の感想～

<p>・実際に商品が販売されているので、お話は現実味があり、商品についての隅から隅まで考えてあった。そこまで考えないといけないんだと思うところまで計算されていて、驚いた。</p>
<p>・商品を実際に売っていくためには、値段設定も大切だと思うが、一番アピールしたいことをまとめないといけない。私がアピールしたい点は、あおさの健康面での働きだったが、講師の方は風味をアピールしたらよいとおっしゃっていました。ここを一致させるべきだと思った。</p>
<p>・消費者に買ってもらえるようなパッケージも山商生が作っていくべきだと思った。商品自体がおいしくても、消費者が見るのは、パッケージだから。</p>
<p>・時代に合わせて商品を考えることが、今後商品を開発することに必要なことだと思いました。また、できる限り独自性があるものがよいと聞き、商品開発に向けてたくさん時間をとることができ、話し合いができる私たちだからこそ独自性がありお客様から興味を持ってもらえる商品を開発していきたいです。</p>
<p>・今まで知ることのできなかつた商品をお店に置くまでの流れや、ニーズ、コストの話など、商品を開発するときに必要な内容だった。今まではお店側のことやお客様のことを考えてというよりは、自分たちの作りたいもの作るという感じだったので、考え直さないといけないところがまだまだあると思った。</p>
<p>・物流と商流がこんなにも深く関わっていることを学んだ。売る立場の意見と買う立場の意見を合わせて初めて長く売れる商品が作られているんだと思った。</p>

- ② 11月には、本校のOBである濱地雄一郎様より伊勢志摩地域の魅力について活動事例を中心に講演していただいた。地元企業の様々な取組を知る中で、マーケティングには発想力と行動力の両方が重要だと学ぶことができた。



(11月の講演会の様子)

ウ 3 学期

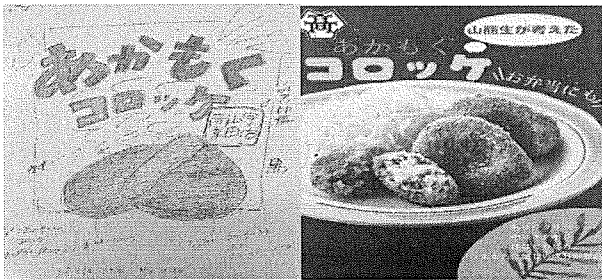
1 年間の活動を振り返り、2 年生に向けた課題研究成果発表会のプレゼンテーションの準備を行った。商品開発の魅力伝えるとともに、現代社会において、商品は単なる利益を上げるためのものではなく、消費という行動を通して社会全体に影響を与えられるものだという事、持続的な社会を形成していくために私たちができる取り組みは何なのか、などについても伝えていきたいと考えている。実践を経験する中で、一つの商品についてより多面的に捉えられるようになった。



(プレゼンテーション作成の様子)

(3) 学習の成果

(生徒の原案)



(企業最終案)



- ア 1 学期に企業へ提案した「あかもくコロッケ」のパッケージデザインは調整の結果、上記 2 のデザイン案として 2 月以降、製品化をすることができた。
- イ 持続可能な開発という視点より SDGs の 12・14 といった目標を設定することで、商品開発の意義がより明確になり効果的に企画・行動につながられた。
- ウ 商品企画について、①ターゲットをどう設定するのか ②消費者目線で考えた際に、どのような工夫をすると購買意欲を高められるのかといった内容を、講演を中心に学習することができた。一つの商品を販売するためには、開発だけではなく、いくつもの行程をふまなければならないこと、それぞれの企業が協力して私たちが手にしている商品は提供されていることを体験できた。

(4) まとめ

今年度は、提案商品を製品化するという目標を立て、主にマーケティングについて取り組んできた。提携企業のご協力のもと、パッケージも含め製品化を実現することができた。本講座で学習できた持続可能な社会の実現という視点を大切にしつつ、次年度は、伊藤忠食品主催の「商業高校フードグランプリ」に出場しこれまでの活動の集大成としていきたい。



3 課題研究「地域ボランティア」講座

(1) はじめに

この講座では座学だけでなく、地域の施設への訪問や交流、各種イベントのボランティアとして参加するといった、「体験」を通じた学びも行っている。このようなことから、ボランティア精神の涵養とノーマライゼーションを理解する力を育成することを目的としている。

しかし、授業中の校外での活動は、訪問できる人数の関係から班ごとに数日間かけて実施することになるため、校内での活動が一斉に行えないという課題もあった。

今年はコロナウィルスの影響で、校外での活動が中止、あるいは自粛したため、ボランティアの精神のひとつでもある、「身近にある課題を積極的に見つけ、解決していこうとする意志」に着目し、SDGs について考える機会を増やすこ

とにした。さらに、ボランティアとして活動する時も、まずは自分の命を大切にしなければ、他人の命を大切にすることはできないと考え、いのちの大切さを考える機会も活動に加えた。

(2) 1 学期の取組

ア. 調べ学習と発表

(ア) 教材「まもるいのち ひろめるぼうさい」のワークショップにより、

注1 CRM、注2 ノンテクニカル・スキルの学習を行った。

災害時やボランティア活動では、常に知人同士が集まっているわけではない。このワークショップでは、班員の構成も工夫し、くじ引きで引き当てた情報を自分から発信しないと、同じ班のメンバーが集まらないようにした。これによって、偶然に集まった班員どうしが、与えられた課題に、どのようにコミュニケーションをとり、協力して課題を解決しなければならぬかを学習することになる。さらにこの学習を通して、今後の班活動において、知人どうしで班を構成することを優先せず、自らの探求心を優先して班を構成し、活動する意欲を育成することもねらいとした。

学習後の生徒の感想からは、意見がたくさん出るということ、意見が採用されるということ、班員からのさりげないアドバイスや助けがとても嬉しかったことなど、課題自体が解決されるという喜びと、人の役に立ち、人との関係が築かれていくことの喜びが伝わってきた。

(注1: CRM (クルー・リソース・マネジメント) とは、航空業界において開発された技法で、積極的なコミュニケーションにより情報交換をおこない、利用可能なあらゆる資源を活用して、より適切な意思決定を支援し、チームが協力して、エラーの発生を少なくしようとする活動と技術を言う。

注2: パイロットの操作技術はテクニカル・スキルと呼ばれ、CRMに活用される技術は、ノン・テクニカル・スキルと呼ばれ、次の5つのスキルで構成されている。①コミュニケーション②状況認識③リーダーシップ④問題解決⑤タスク

青少年赤十字防災教育プログラム「まもるいのち ひろめるぼうさい」より引用)

(イ) 例年は、班ごとにボランティアに関するテーマを1つ選んで調べ学習と講座内発表を行っているが、今年は臨時休校中にオンライン学習を行い、各自でレポートを作成することにした。

後日、テーマごとに教員側で班を構成し、発表資料は模造紙などを用いて作成し、発表後は校内に掲示し、ボランティアに関する広報活動を行った。

発表された各班のテーマは次の通りである。

- ・看護、医療
- ・高齢者
- ・国際貢献
- ・環境
- ・障がい者
- ・防災
- ・子ども
- ・スポーツボランティア
- ・動物愛護

生徒の感想から一部抜粋。

- ・自分が知らないボランティア活動がたくさんあることを知った。
- ・高校生の自分でも始められるボランティアがあることを知った。
- ・ボランティアは、受ける側もする側も、よろこびを感じるができる活動であることが分かった。
- ・自分が知ったことをたくさんの人にも知って欲しい。
- ・個人で十分調べたつもりだったが、班になって話し合ってみるとまだまだ知らないことがあり、勉強になった。
- ・今まで発表をしたことがなかったので、他の班の発表を手本にどうすれば効果的な発表ができるかを学べた。次の機会に活かしていきたい。

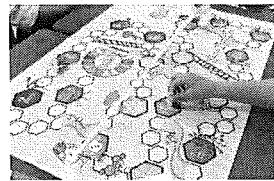
(ウ) SDGsについて、教材「ゴー・ゴールズ」を用いて学習。

学習後は先日の各班の発表テーマがSDGs 17の目標のうち、どれに関係しているかを話し合った。

さらに、教材「未来の授業 私たちのSDGs 探求BOOK」による「日本が抱えているこれから解決すべき課題たち」から、各自が2学期の調べ学習のテーマを選んだ。



校内掲示



ゴー・ゴールズ

まずは、各自で調べたことを発表するが、解決策まで考える必要はなく、どのようなことについて考えていきたいかを示し、一緒に考える仲間を募ることを目的とした。

選んだテーマは次の通りである。

- ・復活できるか水産王国日本
- ・マイノリティの人々の幸せ向上
- ・じわじわ広がる教育格差
- ・出番を求める人々に活躍の機会を
- ・自然災害大国日本
- ・日本が一步先ゆく超高齢化社会
- ・止まらない気候変動
- ・日本でも起きている食料問題
- ・高ストレス型社会からの脱却
- ・やり直しづらい日本社会
- ・先進国なのに高い相対的貧困率

(3) 夏休み中の取組

例年は、各種イベントなどのボランティアに各自が参加しているが、今年は募集が全く無かった。そのため、2学期当初の、仲間を募集するためのプレゼンテーションの具体的な資料作りは、授業が始まってから行うので、夏季休業中は積極的に資料集めなどの準備をすることを課題とした。

(4) 2学期の取組

ア. 調べ学習と発表

(ア) 各自、プレゼンテーションの準備と発表。プレゼンテーションにより集まった仲間(班員)とともに、改めて「日本が抱えているこれから解決すべき課題たち」からテーマを決め、調べ学習を行った。この調べ学習では、実際にSDGsに取り組んでいる企業や団体、個人の活動についても調べることを追加課題とした。

資料映像としてBS朝日「バトンタッチ はじめていますSDGs」の鑑賞も行った。

後日、授業内で発表会を行った。

選んだ主なテーマは次の通りである。

- ・復活できるか水産王国日本(海の豊かさ・海洋汚染)
- ・先進国なのに高い相対的貧困率
- ・自然災害大国日本
- ・マイノリティの人々の幸せ向上
- ・日本が一步先ゆく超高齢化社会
- ・高ストレス型社会からの脱却

*この他、大きなテーマとしてSDGs 17の目標を挙げた班もあった。

*「海」をテーマに発表した班が4班あり、生徒にとっていかに海が身近なものかが感じられた発表であった。

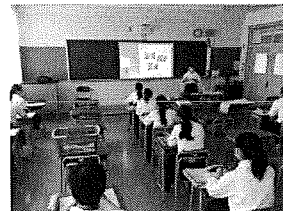
生徒の感想から一部抜粋。

- ・SDGsに取り組んでいる企業がたくさんあって、自分たちでもできることがたくさんあることを知れてよかった。協力していきたい。
- ・調べる機会、学ぶ機会、考える機会が大切。知らないと何もできない。
- ・小さい頃にベルマークを集めていたが、それがどういう活動につながるのか分かった。また集めていきたい。
- ・うわべだけの知識や気持ちだけでは、ボランティアをしてもかえって迷惑をかけてしまうこともあると知った。
- ・解決に向かうためには、一人で悩むより、他の人の意見もあったほうが解決しやすいと分かった。
- ・お金で解決できるのではと思っていた問題も、それは一時的な解決で、持続していくためにはもっと違う視点から考えていく必要があることに気付けた。

イ. 校外学習

(ア) 校外学習として、近隣施設である「伊勢市防災センター」にて、いのちをまもることについて学習した。

時間の都合で、全ての体験を全ての生徒ができたわけではないが、生徒の感想からは、実際に体験したり、その様子を見学したりすることで、い



個人発表

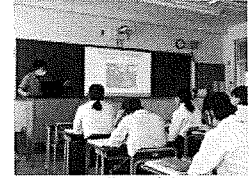
ざというときの恐ろしさや備えの重要性が十分伝わったようである。また、センターの方から教えていただいた、「自助・公助・共助」の言葉が印象に残っているようで、まず自助ができなければ、公助も共助もできない、改めて自分の命の大切さを感じたという生徒が多かった。



防災センター

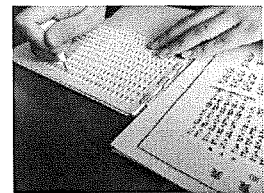
ウ. 外部講師による講座

(ア) 伊勢市社会福祉協議会による福祉体験学習「福祉の話(ユニバーサルデザイン含む)」「ボランティアの話」を受講した。職員の方からお話をうかがい、身近なユニバーサルデザインの実物に触れることで、ユニバーサルデザインは障がいのある人たちだけのものではなく、全ての人たちにとっても使いやすいものであることを実感した。



受講の様子

(イ) 伊勢市社会福祉協議会による体験学習「点字学習(点字・点訳授業)」を受講した。点字についてお話をうかがい、実際に点字を打ったり、読んだりしてみることで、普段私たちが使用する文字と同じように、読みやすい点字とそうでない点字があることを実感した。



点字・点訳の様子

生徒が黙々と取り組む姿に、点字が伝えるのは単なる文字の情報だけではないように感じた。

生徒の感想から一部抜粋。

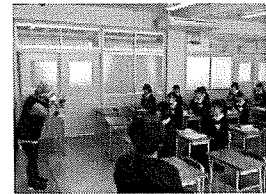
- ・点字と向き合う貴重な時間となった。点字を打つ作業が視覚に障がいのある人のためになっていると考えると、とても大切な作業だと感じた。

- ・点字を見たことはあったが、実際に読んだり、点訳したりすることはなかったので、良い経験であった。点字を読む人が読みやすいように打つことは難しくて大変だが、読む人のことを考えて打たなければと思った。

(ウ) 伊勢市健康福祉部障がい福祉課の方を講師にお招きして、「障がい者サポーター研修」、聴覚障がい当事者の方を講師にお招きして、「手話体験」講座を受講した。

障がい者サポート研修では、障がいについて理解を深め、日常でどのようにサポートしていくかについて学んだ。

手話体験講座では、当事者の方から日常の様子をうかがうことができ、自分がどの様にサポートできるかを考えるきっかけになった。手話を使った会話に初めは戸惑っていた生徒であったが、講師の方から、マウスシールドをしていても、口はしっかり大きく動かしてくれた方がより伝わり、助かる、と教えていただき、次第に動作も大きく口調もはっきりとしていた。講師の方の明るくお元気な様子に、生徒が逆に元気をもらっているようであった。



手話体験講座

(エ) 伊勢市社会福祉協議会による「福祉車両の使い方講座」を受講した。

「福祉車両」と聞いて、介護施設が使用しているような大きな車両を想像していた生徒だが、今回の体験車両が軽自動車だったので、とても驚き、興味津々の様子であった。2人1組になり、車いすに乗る人と介助する人になり乗車体験をした。この体験も、時間の都合で生徒全てが両方の立場を経験することができなかったことが残念であった。講座の最後には、色々と質問し、生徒の関心の高さがうかがえた。



福祉車両体験

生徒の感想から一部抜粋。

- ・スロープは低くても車いすに乗っていると高く感じ怖かった。

- 車いすに乗っている人が安心できるように、注意して介助する必要があると思った。

- 車両に装備されている電動ウインチが車いすを車内に誘導してくれども、初めはなかなかうまく車いすを押し付けなかったが、次第

- にコツを掴んでできるようになった。
- ・特別な知識がなくても簡単に使えた。
- ・こうした車両は特別ではなく、そう高くないお金で特別な装備をつけることができ、利用することができることを知り、将来必要になったら利用したい。



福祉車両体験

(5) まとめと今後の課題

今年度は何かと制限の多い状況での活動ではあったが、日本では「ボランティア」といえば「福祉」といったイメージが多いなか、SDGsの視点から「身近な問題」に着目する機会を設けられたことは一つの成果である。

また、外部講師を招いた講座も多く受講でき、地域でどのような人たちがどのような活動をしているかを知ることができた。このことは、生徒自らが地域とどのように関わることができるのか、どのような役割を担うことができるのかを考える機会となった。

今後の課題としては、これらの活動をいかに自分たちの活動にしていくか、ということである。たとえば、SDGsに取り組む企業や団体の活動を知ったが、それに対して自分たちはどのように参加できるか、毎年の地域の施設との交流をどのように再開していくか、といったことである。これらのことについて、生徒の意見を取り入れながら来年度計画し、活動していきたい。

4 課題研究「日本経済学」講座

(1) はじめに

日経ストックリーグへの参加も今年度で4年目となった。レポートの作成に入る前に、それぞれが関心のある社会の課題をあげ検討していく。4月の授業のスタートはオンラインで行ったが、昨年からのSDGs研修を受けていることから、SDGsとは何かを理解しているため、その後の授業はスムーズに進めることができた。

(2) 投資テーマの決定

個人で作成したテーマ決定ワークシートを持ち寄り、ランダムで4つの班を作り、ブレインストーミングにより意見を出し合う。KJ法を用いて集められた情報を整理し、グループ化していく。その後は各個人の関心のあるテーマごとに4つのチームを作り、日経ストックリーグへの参加が始まった。

テーマ決定ワークシート (個人)

課題研究 (日本経済学)

目的: 企業へ投資をする一企業を支援するために投資家へアピール課題解決

●出た意見 (メモ)

- 環境問題: 地球温暖化、資源不足、森林破壊、水質汚染、大気汚染、騒音問題、廃棄物処理、エネルギー効率向上、SDGs達成に向けた取り組み
- 社会課題: 高齢化社会、少子高齢化、格差拡大、貧困問題、健康寿命の延伸、デジタル格差の解消

●自分が最も投資してみたいテーマを選び、その理由をまとめよう。

<投資テーマ>	1. 環境問題
<投資理由>	SDGs達成に向けた取り組み、環境問題の深刻化、持続可能な社会の実現に向けた取り組み、SDGs達成に向けた取り組み
<SDGsの該当項目>	13, 12, 13

10

課題研究 (日本経済学)

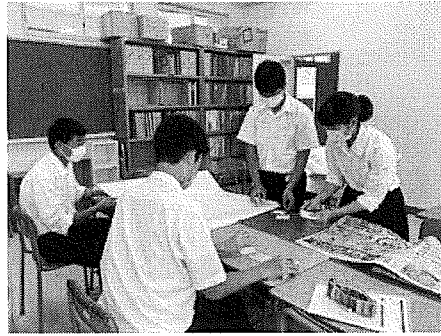
目的: 企業へ投資をする一企業を支援するために投資家へアピール課題解決

●出た意見 (メモ)

- 教育: 教育格差、教育の質の向上、教育の機会均等化
- 社会課題: 高齢化社会、少子高齢化、格差拡大、貧困問題、健康寿命の延伸、デジタル格差の解消

●自分が最も投資してみたいテーマを選び、その理由をまとめよう。

<投資テーマ>	1. 教育問題
<投資理由>	SDGs達成に向けた取り組み、教育問題の深刻化、持続可能な社会の実現に向けた取り組み、SDGs達成に向けた取り組み
<SDGsの該当項目>	4, 10, 13



(3) オンラインでの取材

コロナウィルス感染症拡大により、例年行っていた取材活動が難しくなった。地域における課題について考え、地元企業の取組を知るために、できるだけ取材等を行うようにと指導しているが、生徒たちの動きも遅かった。そのなかである班から、どうしても取材を行いたいと申し出があり、Zoom等のオンラインで行うことを検討した。

今までであれば生徒自ら企業等へ取材のアポイントを取り、取材の意図を説明したうえで、依頼文書を送り取材先を訪問していた。今回は連絡を取った翌日に取材をさせていただいた所もあり、迅速に対応できるオンラインの良さを実感した。また、取材先も伊賀・志摩など遠方であっても、移動方法や時間を気にすることなく取材を行えた。



(4) 生徒の取材レポート

テーマ 無駄なく消費で命は還る ～未来世代のために～

チーム名：地球環境ファンクラブ

企業への聞き取り

テーマ確定までの経緯のなかで私たちは興味を引く新聞記事を見つけた。それが、志摩観光ホテルの記事だった。そこで私たちは、ジビエを通し、食品ロスだけでなく森林保護・リサイクル(循環型社会)・動物保護・環境保全など様々なSDGsの目標に繋がるお話が聞けるのではないかと思い、聞き取り取材のアポイントを取らせていただくことにした。また、コロナウィルス感染症拡大により企業に訪問させていただくことが難しい状況になったが、電話よりもリモートなどお互いの顔を見て熱意を感じたいと考えた結果、Zoomでの対話を提案して頂き2社の企業への聞き取りが実現した。私たちにとって、初めての取材でもありオンラインでの対話だったが、SDGsや企業の取り組みなどについてしっかり取材できた。

〈志摩観光ホテル〉 日時：8月5日

授業でSDGsについて学んでいく中で、朝日新聞に掲載されていた志摩観光ホテルの和食ジビエに関する記事を見て興味を持ったため、食品ロスの抑制や環境保全、森林保護、動物愛護などに繋がると思い、取材をさせていただきました。志摩観光ホテルはシカやイノシシなどのジビエを和食の分野に取り入れており、地元食材の魅力を伝えると同時に資源を守り支える活動に取り組んでいます。

また、志摩市は私たちの地元でもあるので私たちの知らないところでこういった活動に力をいれていて、なぜジビエという地域資源にこだわっているのか疑問をもちま

した。志摩市は自然が多く私たちの生活の中でもシカやイノシシはよくみかけるからです。例えば、夜道の道路に出てきたり、田畑の作物をイノシシが食い荒らしてしまったりして住民の方々を困らせている存在として知っていたので、そういった野生動物を駆除するだけでなくなぜ料理にしようと思ったのか、その経緯を知ることによってSDGsに繋がる持続可能な社会に向けてのヒントが得られると感じました。

『取材内容』

Q1、なぜ志摩市にある沢山の食材の中でジビエを選んだのか

プラスチックごみや海洋汚染の影響で、伊勢エビやアワビの漁獲量が減少しているという理由から、志摩地域でしか取れない特別な食材を、と考えたときに、ジビエが思い浮かんだ。ジビエは衛生管理や鮮度を保つことが難しいため、最大限の美味しさを保つためには、地元で獲れたものが最適だった。



志摩観光ホテルのジビエ料理

Q2、ジビエの獲れる量は一定なのか

夏はシカが、秋はイノシシが多く獲れる。そのため、食材の味やくせが季節ごとに異なるので、その食材に合った調理方法で無駄なくいつでも美味しい料理を提供できるようにしている。

Q3、食品ロスなどについて意識していること

お客様に合ったサービスを行っている。例えば、料理を提供する際にお客様とお話をして、お客様のタイプや好みに合わせた量やサービスをすることで食べ残しが出ないようにしている。

Q4、海洋汚染により獲れなくなっている食材について

天然のものにこだわっているため、海女さんが獲ってきたものを提供している。しかし、海洋汚染や地球温暖化によりアラメや海藻が弱ってしまい、それを餌とするアワビなどの貴重な食材が元気に育たず栄養不足になっている傾向がある。また、獲れる量も減っているため会社の利益にも大きく影響しているのが現状。

Q5、コロナの影響で使わなくなってしまった食材について

志摩観光ホテルとしては余ってしまった食材などはないが、南伊勢で真鯛の養殖業を行っている人から出荷できない大きい鯛を購入している。(コロナゼロプロジェクト) 普段は天然の食材を使用しているが、コロナの影響もあり養殖を使うことで食材を無駄にしないようにしている。

○考えたこと

害獣と呼ばれる野生動物を駆除するだけでなく、その後調理をすることで無駄なく消費できるためジビエ料理がこれから広まっていけば良いなと思った。しかし、衛生的に簡単には商品にできないことも初めて知った。また、身近な野生動物だからこそ命をいただくことの思いテーマをより一層身近に感じる事ができた。そして、地域資源の利用を実現させるには、地域の信頼と同じ目的を持った方々の協力が重要になってくると思った。これはSDGsの目標12の「つくる責任・つかう責任」に通ずると思った。

<モクモクファーム> 日時：8月4日

テーマを決める際、地元で食品ロスなどに取り組んでいる企業を調べた時に、モクモクファームの取組に興味を持ちました。モクモクファームは「やさしさ宣言」を掲げており、「ごみ」を出さない施設を目指している。また、リサイクルや風力発電も行っているため、6次産業という新しい形の農業を行っている先駆者としてお話を聞きたいと思い、取材させていただきました。

また、環境問題に多く取り組んでいるため食品ロスだけでなく森林保護や動物愛護、地域活性化などの問題にも繋がるお話を聞かせていただきました。

『取材内容』

Q1、環境問題に積極的に取り組んでいるなかで一番大切にしていること

お客さんが普段生活している中で、インパクトよりも環境に対して思うことを考え

ている。問題解決よりも私たちが生活しているなかでどれだけ共感を得られるかを基準にしている。

Q 2, 6次産業に取り組もうと思ったきっかけ

ハムやソーセージを作ると仲介業者が必要になり、コストがかかってくる。そのため、生産・加工・販売を一貫して行うことで利益を上げることができる。全てを自分たちで行ったほうが、人間関係の輪も広がり商品の説明もしやすい。1次産業を6次産業に変えたイメージ！

Q 3, 地球環境を守るためのアイデアはどの様にしていますか

他と比べたり、他からアイデアをもらったりするが生活のなかで共感してもらえることができるかが大切。それを子どもたちの教育にも繋がればもっと得だと思っています。お客さんと同じ目線にたち、楽しんでやってもらえるか考えている。他にも、季節に合わせたイベントも考えている。

Q 4, 食品ロスや食品リサイクルについて・・・

取組内容や取り組む上で意識していることや大切にしていること
ファーム内で使用する量より多く獲れることがある。そういう時は、ジャムやソース、シロップにして販売し無駄が出ないようにしている。他にも、ベーコンなどの切れ端はロスになってしまう。それをセットにして販売したり、社内販売したりすることで廃棄の量を減らしている。また、ビュッフェスタイルの食品ロス対策などについてはまだまだ課題があると思う。

Q 5, 地域資源にこだわる理由

お金のためではなく、地元の農家を元気にするのが目的。
外国産のものを使うのはポリシーに反してしまうし、地元を元気づけることができない。お金は会社を継続するための手段であり、お金を稼ぐことが目的ではない。美味しいパンを追求するのではなく、国産の材料でいかにおいしいパンを作るかが大切。

Q 6, 動物との触れ合いを通して子供たちに学んでほしいことは何か

家畜動物と生活との関りを大切にしてもらおう。畜産物(牛乳やソーセージ)を通して暮らしとの関りを学び、人と人との繋がりを感じてほしい。命について考え、動物を大切に思ってもらいたい。

Q 7, ジビエ(鹿など)の取扱いや取り扱う予定はあるか

三重県でも現在、ジビエの取扱いに力を入れているため害獣を使用して食品を作れたら良いなと考えている。しかし、鮮度と衛生面を考えると安全性に不安があるため、取り扱うのは難しい。また、野生動物は狩ってから1時間以内に加工場にもっていかなくてはならない。もし可能になれば、ジビエ食品としてハムやソーセージにできたら良いなと考えている。

○考えたこと

環境問題が得に重視されているなかで、問題解決より共感を大切にして環境問題に取り組んでいる考え方に驚いた。また、食品ロス問題についてはまだまだ課題があるとおっしゃっていたのを聞いて、食品ロス解決がいかに難しいことが理解できた。そして、目的よりも手段を大切にしているというお話では、目的は一緒でも思いが違えば内容ややり方が変わってしまうことを知った。多くの人の笑顔のため、地域を元気にするため、という熱意を感じた。

取材を通してどう今後につながったか

今回の取材を通して、持続可能な社会を実現させるためには今私たちの身近で問題になっていることや環境問題に着目し、知ることが重要だと思った。解決には、どのようなインパクトでどんな価値があるのか、SDGsの169のターゲットを意識して考えることが重要になってくると感じた。そして、どういった手段で解決に導いているのかを企業それぞれでよく観察していきたいと思った。また、私たちの住んでいる三重県にも多く持続可能な社会に向けて活動している人が居ることを知った。街のため、地域のために活動していることが持続可能な社会に向けての先駆けになっているのではないかと思った。

企業は、消費と社会貢献を両立させることでよりよい社会に向かうことができると考えた。今年には新型コロナウイルスの影響により世界中で大きな変化が起きた。人々の生活は厳しくなったが、環境的にはプラスだったことなどもあった。私たちも本来なら企業訪問など、伺わせていただく予定だったがリモートという形をとった。初めて

の体験だったが、私たちにとってもいい機会になり学んだことも多かった。

(5) 学習の成果とまとめ

コロナウイルス感染症拡大防止による休校で授業のスタートが2ヶ月遅れたことや、講演会等のイベントに参加するなどの校外に出て行く機会がないなど、様々な制約があったが、それぞれのチームは自分のできること、自分は何がやれるかをしっかりと考えて行動できていた。

また、オンラインによる取材ができたことは大きな成果であった。取材だけでなく、講演会もオンラインで参加するなど工夫して取り組んでいた。これらの活動はレポートを作成するためだけでなく、進路選択、決定そしてこれから社会に出て行くうえで活かされていく力になったと考える。

(6) 今後の課題

オンラインでの取材に協力していただいた企業の方々の丁寧な対応により、画面を通してではあるが、その場でお互いが実際に話しているようにやりとりをさせていただいた。生徒側も緊張せず、気軽に質問できている印象を受けた。実際に自分たちで見て聞いてする体験は大切ではあるが、移動時間と場所を気にせず行えるオンライン取材はこれからも活用していきたい。今後は、オンラインと対面での取材を併用していければと考えている。

ただ、オンラインを利用し取材を行った班はあったが、取材等を促しても自ら動こうとしない班も多かった。レポート作成は上場企業についての考察になるが、地域との関わりを持ちながら、主体的に地域と協働できるよう進めていけるよう指導していくことが課題である。テーマ設定において世界、日本の動きに目を向けることはもちろん必要であるが、まずは自分の身の回りなど地域の課題からSDGsを考えていけるようにしていきたい。

5 地域課題の解決を目指す探求型アクティブラーニング授業の実践 ～オープンデータを活用して地域の課題解決を目指す取組～

(1) はじめに

本校では、平成29年度から情報処理科の3年生2単位の選択科目「ビジネス情報管理」において、伊勢市が公開しているオープンデータを活用した取組を行っている。情報処理科は、「情報処理の知識を基にビジネス社会で活躍する人材の育成」を学科目標と掲げているが、全国でもトップクラスに値する経済産業省情報処理国家試験の合格実績がありながらも、その知識や技術を生かした取組が出来ていなかった。そこで、授業や国家資格取得挑戦で養った知識や技術を生かし、地域課題の解決を目指した取組を行うこととなり、地元企業や行政、専門学校等と協力した取組を行ってきた。

昨年度は、伊勢市のゴミ問題、伊勢市の観光地や特産品、食文化紹介HP制作、防災クイズアプリ制作などに取組み、今年度は、3年生情報処理科「ビジネス情報管理」を受講する26名の生徒が以下に説明する地域課題の解決に取り組んだ。

(2) 2020年度の取組み

生徒たちが考えたテーマに沿って、7班に分かれて活動を行った。昨年度末から続いた新型コロナウイルス感染症予防の取組により4月当初は授業を実施することが出来なかったが、5月には本校でもオンライン授業の環境が整い、画面を通して授業担当者の紹介や授業の進め方、今年度の目標について説明し、「伊勢市の魅力」をチャット機能を利用して話し合った。

長い休校期間を経て、6月から学校が再開した際には、オンライン授業で進めてきた授業のイメージを、ブレインストーミングやKJ法を活用し、授業の目的でもある「SDGs」や「エシカル」などの視点を入れながら意見をまとめ、同質の意見を持った3～5名で構成した7つのグループを作り活動を進めた。

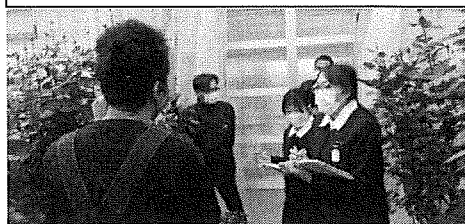
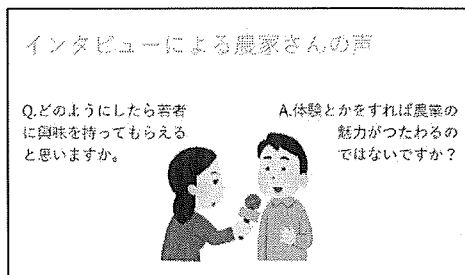
1 班 地域農業の活性化（農業アルバイト）

【目的】

アルバイトを通して、第一次産業の作る楽しさや自らが作った農作物が売れる楽しさを感じてもらい地域農業活性化を図る。

【内容】

「現在、若者が第一次産業に興味を持たない傾向がある。その理由としては、天候が不安定で収入が安定しないことや休みがないことなどである。」と仮説を立て、若者が興味を持ち少しでも気軽に第一次産業に携わることができるよう、農作業から販売までを行う第六次産業のアルバイト企画を考え、JA伊勢の協力の下、農家の声を聞き「農業アルバイト」のHPを作成に取り組んだ。



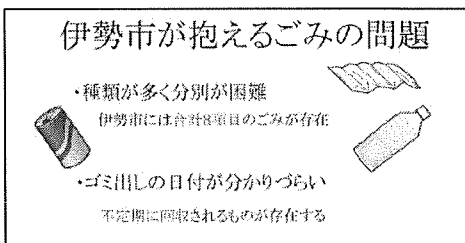
2 班 「5374・ゴミナシ」アプリの新バージョン開発

【目的】

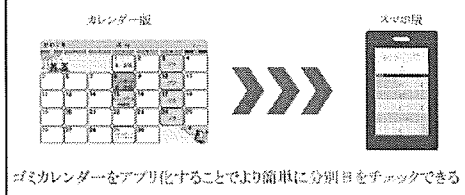
伊勢市民が利用する「ごみカレンダー」を、新しく伊勢市に転入する人でも分かりやすく適切にゴミ捨てが出来るようにしたい。

【内容】

既存のオープンソースを利用して伊勢市版「5374アプリ」を制作。名古屋工学院専門学校と共同でアプリ制作に取り組み、伊勢市清掃課と議論を重ねて、カレンダー版の新バージョン「5374・ゴミナシ」アプリを制作した。また、伊勢市のゴミ排出量や回収する生ゴミ中に含まれる水分量を示したHPを制作し、ゴミ出しの注意喚起も行った。



1. ごみカレンダーの作成



3 班 Ise Mobility Program ~伊勢の交通と観光~

【目的】

伊勢に来る観光客が、公共交通機関を利用しても、駅周辺の観光施設を効率的に利用してもらいたい。

【内容】

観光客がバスの待ち時間やちょっとした空き時間を有効に活用できていないのではないかと、そのため、公共交通機関を利用した伊勢市への観光客が少ないのではないかと考えた。

その解決方法として、google map を利用して、駅周辺の飲食店や施設への移動時間や、施設の写真やイラストなどの情報を掲載するサイトを制作した。また、公共交通機関を利用する観光客に対して、駅周辺にあるレンタサイクルを利用した観光のプランをHPにて紹介を行う。



4 班 SDGs ~食べきり応援店・すぐ食べるなら連れてってキャンペーン~

【目的】

SDGs の目標 12「つくる責任・つかう責任」の達成に向け、伊勢市でも問題となっている「食品ロス」の研究と消費者の関心を高め食品ロスの削減を目指す。

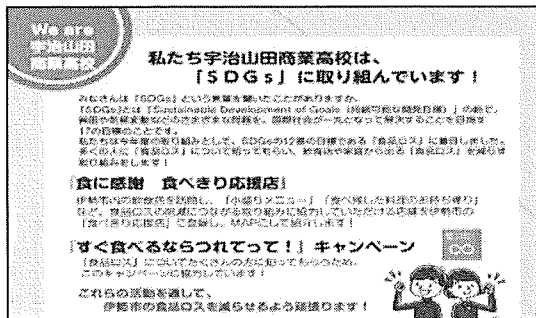
【内容】

地元伊勢市清掃課と連携し、スーパーの惣菜売り場などで割引シールが張られた賞味期限が近い商品の廃棄処分を軽減するために、「すぐ食べるならつれって！キャンペーン」を行い参加を呼びかけ、食品ロス削減に協力した。また、割引シールの張られた商品の購入に抵抗感のある消費者に対しても、価値観の変化を促すことで抵抗感を除くことができると考えた。

12 つくる責任 つかう責任

★2030年までに小売・消費レベルにおける食料の廃棄を半減させる

★収穫後損失などの生産・サプライチェーンにおける食品ロスを減少させる



飲食店にも働きかけ、食事を食べることができるよう、メニューに大盛・普通・小盛などのバリエーションを設けるなどの「食に感謝 食べきり応援店」への参加を、市内の複数の店舗を周り依頼し、協力店にはGoogle MAP上にマッピングを行い利用客へのアピールを行った。

5 班 伊勢市ハザードマップ

【目的】

伊勢市は洪水発生時の被害を多く受ける地域であることから、避難するために必要な情報を簡単に検索できるサイトの作成し、防災意識の向上と災害時に市民の素早い避難の実現。

伊勢市洪水ハザードマップ作成の目的

- ①・伊勢市は洪水発生時に被害を受ける地域が多いから
- ②・洪水発生時に市民の方が素早く避難できるように
- ③・避難場所の情報を掲載することで避難以外の用途でも活用できるように

【内容】

伊勢市に限定したハザードマップを「重ねるハザードマップ」を利用し、地域ごとにマップを切り取り、地名をクリックすることで検索が出来るHPの作成を行った。地域名を入力する手間を省き効率的に対象地域のハザードマップを確認出来るように工夫した。避難所の一覧は、伊勢市HPへ移動できるようなリンクを付けた。また、昨年度開発した防災クイズゲームアプリ「花さかいせり」のポスター製作を行い、防災意識の向上と啓発を行った。



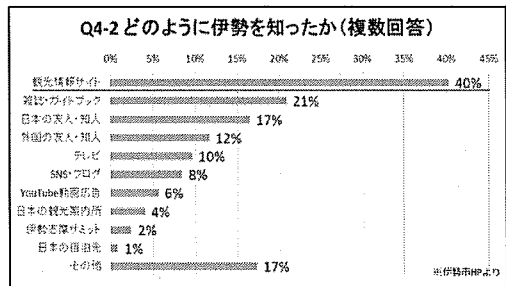
6 班 外国人向け伊勢志摩PR ～疑似体験 Web サイト～

【目的】

伊勢市に訪れる外国人観光客は増加しており、そのほとんどがインターネットを通じて伊勢を知ったというデータがある。近年、疑似体験を好む外国人観光客も増加していることから、疑似体験が出来る施設をまとめ紹介し外国人観光客の増加を図る。

【内容】

真珠の取り出し体験や、忍者の衣装をまとい忍者修行を味わうアトラクション、海女さんが漁で疲れた体を休め、火を焚いて体を温める海女小屋で海女文化に触れ食事や会話を楽しむ海女小屋体験など、伊勢志摩地域において疑似体験が行える施設を一覧にまとめたHPの作成を行った。また、横山展望台や朝熊山、宮本武蔵が修行を行った伝説が残る鷲嶺山の紹介も行った。



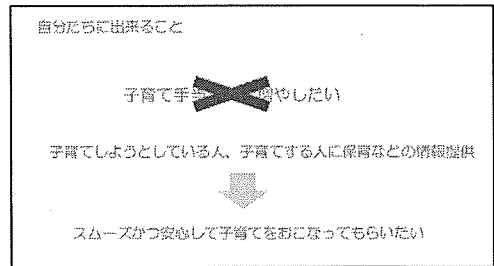
7班 子育て支援

【目的】

少子高齢化はなぜ進んでいるかと考えたときに、子育てをすることが大変だからという意見になったことから、高校生の自分たちが支援出来ることを考え、保育園等同士を比較できるWebサイトの作成や保育園等の現状について調査し、情報提供することで安心して子育てが出来るように支援する。

【内容】

近い将来、子育てしようとする人や子育てしている人に様々な情報を提供し、スムーズかつ安心して子育てをしてほしいことから、Webサイトを作成し、保育園の種類別に地図にマッピングし、定員、入園年齢、住所、電話番号の情報を記載した。また、伊勢市保育課の協力により保育園へ行事や雰囲気、魅力について実施したアンケート結果を掲載したり、伊勢市の子育てへの取組について、情報を掲載することで利用者が安心して子育てできるように工夫した。



(3) 伊勢市長への報告会



2021年1月25日、本校において地域課題を解決するために取り組んだ1年間の成果を、伊勢市長をはじめ、生徒の取組に協力をいただいた多くの関係者の方に参加いただき成果報告会を実施した。

参加者は7グループの報告を真剣に聞き、HPを制作したグループの発表においては、スマートフォンを操作し、実際にHPを確認しながら生徒の発表を聞く姿も見られた。

今年で4年目となる報告会には、アプリ制作に協力してくれた名古屋工学院専門学校の関係者もオンラインで参加した。その中には、昨年度本校生徒として報告を行い、今年度は本校生徒の提案したアプリの開発に協力してくれた卒業生の姿があった。



2021/1/28 中日



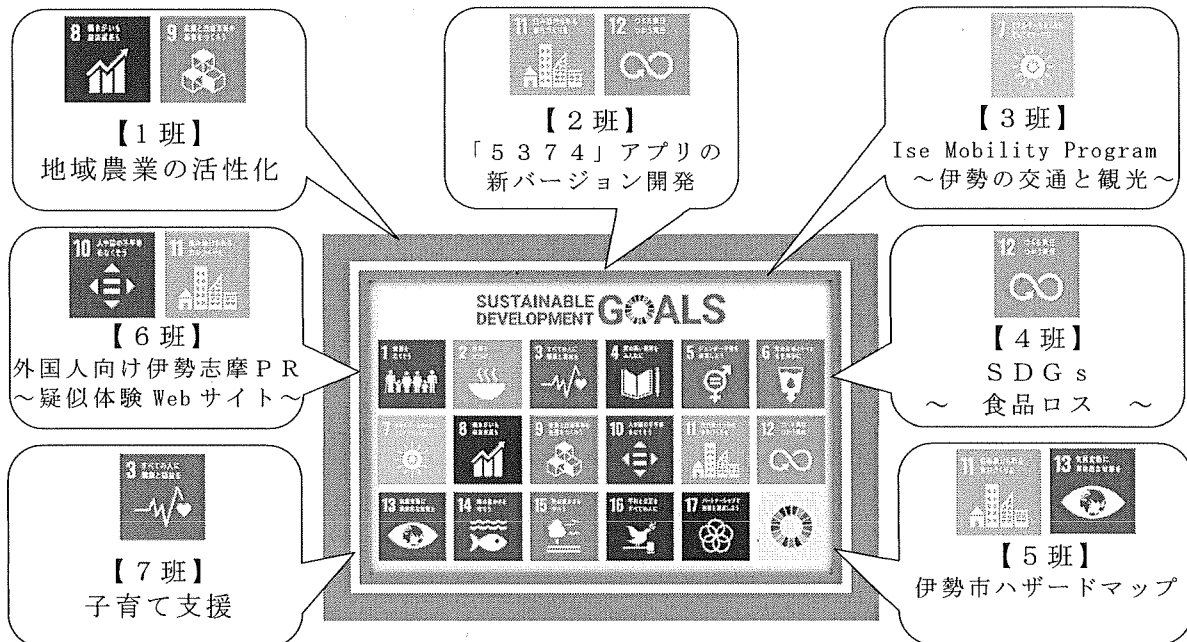
2021/1/26 伊勢

(4) おわりに

伊勢市をはじめJA伊勢や多くの関係者に協力をいただき、今年度も無事報告会の開催まで行えたことに感謝する。今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響が大きく、生徒の活動時間は制限されたが、取組内容としては昨年度に勝るとも劣らないものとなった。生徒たちの取組内容は「食品ロス」や「農業の活性化」といった社会問題から、「観光」を取り上げた地域産業の活性化、「子育て支援」による住みやすい地域環境の整備など幅広く取り組むことが出来た。行政や企業そして地域と連携し、課題解決に向けて交渉や打ち合わせを繰り返し、現状を確認・把握するために現地視察やアンケートの実施など、しっかりと課題と向き合うことができた。グループでの活動が中心となるため、効率的な作業に必要なコミュニケーションの取り方やそれぞれの役割分担が自然と出来るようになった。

これらの活動により、多くの事を学び、自分たちの考えを形に変え、実体験をとおして成長する事ができた。時には、失敗し厳しい言葉を受けたこともあったが、投げ出すことなく1つずつ解決し前に進むことが出来、自覚と自信を持って取り組む様子がうかがえた。

今年度の取組を活かし、来年度は地域との連携を強化し、地元伊勢市に貢献できる取組を引き続き行っていきたいと考える。



6 ビジネス経済応用

(1) はじめに

「ビジネス経済応用」は商業科マーケティングコース生徒38名を対象にした講座である。商業教育の、検定取得至上主義から脱却を目指した。そして、生徒たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成するなどして新たな価値につなげていく力を育成するために、身近な問題を取り上げ、様々な外部の力を交えて授業を行った。

(2) 取組内容

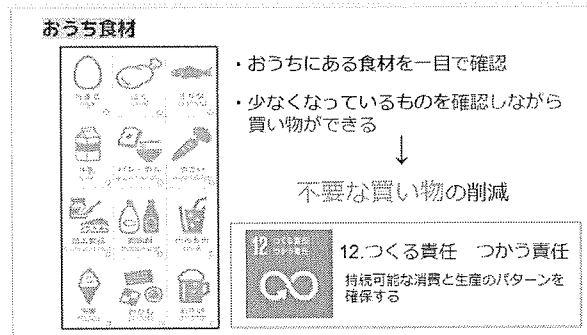
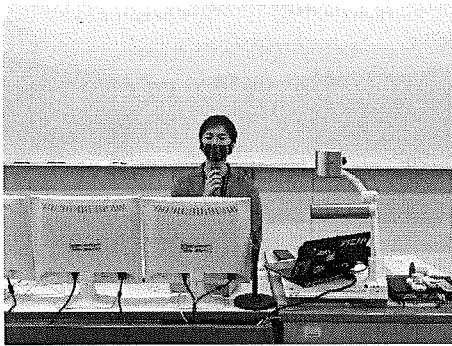
ア NEX T親世代トーク

育児に男女での参画をするための意識改革のために、鈴木英敬三重県知事に来校頂いた。「NEX T親世代」である若い世代は、「父親も積極的に育児に参加すべき」という考え方を有する割合が高くなっており、これらの世代の意欲を維持し、積極的な男性の育児参画につなげていくとともに、パートナーとともに行う育児の重要性への理解を広めるため、知事と高校生との「NEX T親世代トーク」を実施した。



イ 中小企業庁「令和2年度起業家教育事業」起業家教育プログラム

起業家教育プログラム実施支援事業のモデル実施校として20時間のプログラムを実施。地元の課題・魅力を、エイチエムプロデュース濱地雄一郎様などを講師に招いて助言を頂く。8班に分かれて令和2年度「地域・企業共生型ビジネス導入・創業促進事業(地域・社会課題の解決支援)の起業家教育事業」におけるJapan Challenge Gate 2021 ～全国ビジネスプランコンテスト～に応募した。



(3) まとめと今後の課題

今年度は、コロナ禍のため従来であると県外からの講師などもお願いをしていたが、活動に制限がある中ではあるが、google classroomなど新しい機器を活用して、生徒も大変順応して新しい形でも例年以上に行うことが出来た。今後は、校内外も時間も縛られること無く自分たちの学習を進めて行けることが分かったことが大きな成果であった。また、講師を県内に限ることで地元の魅力など掘り下げることが出来た。

課題としては前述の力の育成のために、起業家教育などを取り入れてビジネスプランなどを考えてきたが、今後はビジネスプランを地域などと連携をして実施してプランの修正などさらに発展していけるように、今後はプランの実施も視野に入れる必要がある。